

県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告 5

そう ばる
宗 原 遺 跡

福岡県文化財調査報告書

第 116 集

1 9 9 4

福岡県教育委員会

県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告 5

宗原遺跡

そう ばる
S O H B A R U

福岡県文化財調査報告書

第 116 集



1 9 9 4

福岡県教育委員会



(1) 宗原遺跡出土および宗原・向福島遺跡採集石器



(2) 宗原遺跡基本土層①



(3) 宗原遺跡全景（南から）

序

本書は、県道久留米－筑紫野線の建設に先立って平成5年度に実施した、筑紫野市大字西小田地区ならびに朝倉郡夜須町大字東小田地区に所在する宗原遺跡の発掘調査報告書です。

当地域は以前より、筑紫野市の隈・西小田遺跡、夜須町の東小田峯遺跡やヒルハタ遺跡などの弥生時代を中心とした数多くの遺跡が知られていましたが、今回の調査により旧石器時代（約20,000年前）の生活の一端をも知ることができました。

この成果が、地域史研究や文化財愛護思想の普及に供することができれば幸甚です。

なお、調査の実施および本書の作成にあたり御協力いただいた筑紫野市教育委員会と夜須町教育委員会をはじめとする関係各位、ならびに地元の多くの方々に心から感謝いたします。

平成6年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

例 言

1. 本書は平成5年度に福岡県教育委員会が福岡県土木部道路建設課（甘木土木事務所）から委託を受けて実施した、県道久留米―筑紫野線の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査記録で、県道久留米―筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告書の5冊目にあたる。
2. 本書に記録した宗原遺跡は、筑紫野市大字西小田字宗原および朝倉郡夜須町大字東小田字サヤテの二市町に股がり所在する。
3. 本書に掲載した遺跡図は、石橋丸子・田中紘子・横田雅江の補助を受けながら水ノ江和同が作成した。
4. 本書に掲載した遺構写真は水ノ江が、遺物写真については、巻頭図版を九州歴史資料館・石丸洋に、その他を北岡伸一と水ノ江が撮影した。なお、空中写真についてはフォト大塚に委託した。
5. 出土遺物は九州歴史資料館において岩瀬正信の指導で整理・復原作業を行ない、実測作業は福岡県文化課太宰府事務所において平田春美の協力を得て行なった。なお、石器の実測は福岡県文化課・杉原敏之による。
6. 図面の浄書は豊福弥生・原カヨ子の協力を得た。
7. 使用した方位は、遺構配置図では真北、個別の遺構実測図では磁北である。
8. 宗原遺跡周辺の旧石器資料の紹介については、その所有者である平田定幸氏（春日市教育委員会）ならびに鬼木和憲氏（夜須町在住）の快諾を得た。また、それらの資料の実測は小畑弘己氏（福岡市教育委員会）による。
9. 火山灰同定のための土壌のサンプリング、ならびにその分析所見の執筆は九州大学理学部地球物理学教室助手の下山正一先生にお願いした。なお、火山灰そのものの同定と報告については株式会社京都フィッシュントラックに委託した。
10. 遺跡の概要説明に関する英語訳は佐々木憲一氏（ハーバード大学）に、韓国語訳は小池史哲（福岡県北九州教育事務所）・緒方 泉（福岡県筑豊教育事務所）にお願いした。
11. 本書の執筆は石器については杉原が行ない、他の執筆ならびに編集を水ノ江が行なった。

本文目次

	頁数
I. はじめに	1
1. 調査の経過と組織	1
2. 位置と環境	3
II. 遺構と遺物	5
1. 旧石器時代の遺構と遺物	5
1) 調査の方法	5
2) 層序	6
3) 遺物の出土状態	8
4) 礫群	9
5) 出土遺物	10
2. 縄文時代以降の遺構と遺物	18
1) 土壌	18
2) 溝	24
3) その他の遺構と遺物	25
III. 火山灰の分析	26
1. 宗原遺跡土壌層からの火山ガラスの抽出と始良-Tn 火山灰 (AT) の降灰層準	26
1) はじめに	26
2) 宗原遺跡の土層	26
3) 分析方法	28
4) 土層中火山ガラス含有率分析結果	28
5) 旧石器包含層と降灰層準との関係	29
2. 宗原遺跡土壌中火山灰抽出分析の報告	30
IV. 宗原遺跡出土旧石器の位置づけ—宗原遺跡および向福島遺跡採集資料の紹介をかねて—	34
V. まとめ	42

図版目次

- | | | |
|------|-------------------------------------|---------------------|
| 図版 1 | (1) 宗原遺跡全景（南から） | (2) 宗原遺跡全景（北東から） |
| 図版 2 | (1) 宗原遺跡全景（南東から） | (2) 土層断面②（南西から） |
| 図版 3 | (1) 土層断面①（南東から） | (2) 土層断面③（南から） |
| 図版 4 | (1) 礫群出土状態（西から） | (2) 石器（3）出土状態（南から） |
| 図版 5 | (1) 石器（25）出土状態
(3) 石器（20）出土状態 | (2) 石器（23）出土状態 |
| 図版 6 | (1) 宗原遺跡出土石器 1（表） | (2) 宗原石器出土石器 1（裏） |
| 図版 7 | (1) 宗原遺跡出土石器 2（表） | (2) 宗原石器出土石器 2（裏） |
| 図版 8 | (1) 宗原遺跡出土石器 3 | (2) 宗原石器出土石器 4 |
| 図版 9 | (1) 宗原遺跡出土石器 5 | (2) 宗原石器出土石器 6 |
| 図版10 | (1) 土壌群全景（南から） | (2) 土壌群全景（北から） |
| 図版11 | (1) 1号土壌土層断面（北西から）
(3) 1号土壌出土石器 | (2) 1号土壌（北から） |
| 図版12 | (1) 2号土壌土層断面（北から） | (2) 2号土壌（南西から） |
| 図版13 | (1) 3号土壌土層断面（西から） | (2) 3号土壌（西から） |
| 図版14 | (1) 4号土壌土層断面（北から） | (2) 4号土壌（南から） |
| 図版15 | (1) 5号土壌土層断面（西から） | (2) 5号土壌（南から） |
| 図版16 | (1) 6号土壌土層断面と7号土壌（南東から） | (2) 7号土壌（北から） |
| 図版17 | (1) 8号土壌土層断面（東から） | (2) 8号土壌（東から） |
| 図版18 | (1) 9号土壌土層断面（南から） | (2) 9号土壌（東から） |
| 図版19 | (1) 10号土壌土層断面（南から） | (2) 10号土壌（南から） |
| 図版20 | (1) 11号土壌土層断面（南から） | (2) 11号土壌（南から） |
| 図版21 | (1) 12号土壌土層断面（東から） | (2) 12号土壌（東から） |
| 図版22 | (1) 北調査区全景（夜須町側 南から）
(3) 1号溝出土莖英 | (2) 1号溝礫出土状態（北から） |
| 図版23 | (1) 宗原・向福島遺跡採集石器（表） | (2) 宗原・向福島遺跡採集石器（裏） |

挿 図 目 次

	頁数
表 紙	宗原遺跡の位置……………表紙
第1図	宗原遺跡から城山を望む（北西から）……………2
第2図	宗原遺跡周辺の遺跡分布（1/25,000）……………4
第3図	宗原遺跡調査地点（1/10,000）……………5
第4図	土層断面①・②・③実測図（①・②は1/30 ③は1/60）……………7
第5図	石器出土分布図（1/250）……………折り込み
第6図	石器石材別出土分布図（1/250）……………折り込み
第7図	倒木痕状遺構実測図（1/60）……………9
第8図	礫群出土状況実測図（1/20）……………9
第9図	石器実測図1（2/3）……………11
第10図	石器実測図2（2/3）……………12
第11図	石器実測図3（2/3）……………13
第12図	石器実測図4（2/3）……………14
第13図	1～12号土壌配置図（1/200）……………18
第14図	1号土壌実測図（1/60）……………19
第15図	1号土壌出土土器実測図（1/4）……………20
第16図	2・3号土壌実測図（1/40）……………20
第17図	4・5号土壌実測図（1/40）……………21
第18図	6・7号土壌実測図（1/40）……………22
第19図	8・9号土壌実測図（1/40）……………23
第20図	10～12号土壌実測図（1/40）……………24
第21図	1号溝出土および表土採集の遺物実測図（1/3）……………25
第22図	土壌のサンプリング風景（南西から）……………26
第23図	土層②における土壌サンプリングポイント（1/20）……………27
第24図	サンプル別火山ガラス含有率グラフ……………28
第25図	宗原・向福島遺跡採集石器実測図（2/3）……………35
付 図	宗原遺跡遺構配置図（1/200）……………袋入り

表 目 次

	頁数
第1表 宗原遺跡出土石器観察表.....	15
第2表 宗原遺跡出土石器組成表.....	15
第3表 サンプル別火山ガラス含有率一覧表.....	28
第4表 保存用試料一覧.....	31
第5表 火山ガラス形態分類一覧表.....	31
第6表 火山ガラス屈折率測定一覧表.....	31
第7表 火山ガラス屈折率データシート.....	32
第8表 宗原・向福島遺跡採集石器観察表.....	36

巻 頭 図 版

- 巻頭図版 1 (1) 宗原遺跡出土および宗原・向福島遺跡採集石器
(2) 宗原遺跡基本土層①
(3) 宗原遺跡全景（南から）

I は じ め に

1. 調査の経過と組織

近年の交通量の増大に伴い、久留米市と筑紫野市を結ぶ一般国道3号線の混雑は一層激しくなりつつある。この混雑を緩和するため国道3号線については拡幅やバイパスの新設が逐次行なわれているが、市街地を迂回する県道久留米—筑紫野線（県道53号線）の新設も同時に急がれている。

こうした計画に伴い、県道久留米—筑紫野線に関連した調査が現在まで都合6次に亘って随時実施されているが、平成5年度開通予定地内における文化財の確認要請が、平成4年1月福岡県甘木土木事務所から筑紫野市教育委員会にあった。筑紫野市教育委員会はこの旨を福岡県福岡教育事務所と北筑後教育事務所に連絡し、甘木土木事務所との協議のうえ同年1月と12月に試掘調査を行なった。その結果、土壌・溝・ピット等の文化財の存在を確認した後、本調査の必要を回答した。本調査の対象となる範囲は、筑紫野市と夜須町の両市町に股がるため、本来那珂・甘木の両土木事務所の管轄になるが、これも協議・検討の結果、文化課と甘木土木事務所との間で今後の対応が図られることとなった。

本調査は平成5年5月26日から重機による表土の除去作業を開始し、同年7月31日までの約2ヶ月間に亘り行なった。しかし、例年にない長雨の梅雨と重なり、発掘作業は困難を極めたたび中断した。調査終了後ただちに遺物の整理作業を九州歴史資料館と文化課太宰府事務所において行ない、平成5年度中に報告書を刊行することとなった。発掘調査および報告書の作成に関する組織は下記の通りである。

福岡県甘木土木事務所

所 長	柿添 清美
建設課長	中垣 勝征
第一係長	手嶋 其次
技術主査	大内田 功

福岡県教育庁指導第二部文化課

総括	教育長	光安 常喜
	文化課長	森山 良一
	文化財保護室長	柳田 康雄
	文化財保護室長補佐	井上 裕弘
	調査班総括	橋口 達也

	調査班総括補佐	高橋 章
庶務	文化課管理係長	毛屋 信
	同主任主事	安丸 重喜
調査	文化課主任技師	水ノ江和同

福岡県教育庁北筑後教育事務所

所 長	尾花 正樹
社会教育課長	野中 浩
主 任 技 師	赤司 善彦

平成4年度の試掘調査は、筑紫野市分については福岡教育事務所および筑紫野市教育委員会が、夜須町分については北筑後教育事務所がそれぞれ実施した。

調査においては、井上和人（福岡県文化財保護指導委員）、松藤和人（同志社大学講師）、山野洋一・長野卓司・森山栄一（筑紫野市教育委員会）、石井扶美子（夜須町教育委員会）、片岡宏二・柏原孝俊（小郡市教育委員会）、木下修（福岡県文化課）、中間研志（福岡教育事務所）、佐々木隆彦（九州歴史資料館）、平島文博（三輪町教育委員会）、赤川正秀（大刀洗町教育委員会）、小畑弘己（福岡市教育委員会）、平ノ内幸治（宇美町歴史民俗資料館）の各氏をはじめ多くの方々に御配慮・御協力を賜わった。ここに記して感謝の意を申し上げます。

また、火山灰の土壌サンプリングと遺跡の地形形成ならびに火山灰の同定については、下山正一先生（九州大学理学部助手）に格別の御配慮を賜わったことを、改めてお礼申し上げます。

なお、発掘調査の作業に従事していただいたのは次の方々である。

米倉サカエ 米倉フユキ 米倉久子 小能見キヨ子 田中タツ子 古賀ハナ子
 仲タツ子 草場拓子 児玉憲子 福島澄子 井口勝子 中原富子 白木カズ江
 松永アヤ子 横田雅江
 古賀寿美子 高原イツ子
 石橋丸子 因間美枝子
 山本文子 伊藤夏子
 田中紘子 高野久子
 松本直久

（順不同、敬称略）



第1図 宗原遺跡から城山を望む（北西から）

2. 位置と環境 (第2・3図)

宗原遺跡は筑紫野市大字西小田字宗原および朝倉郡夜須町大字東小田字サヤテの両市町に股がり所在する。宝満川の支流である曾根田川の東に広がる標高約23mの河岸段丘西端部に立地し、南東約2.5kmには標高130.6mの城山^{じょうやま}(花立山)を臨む(第1図)。現状では比較的平坦な水田と畑地になっているが、地元の古老の話では戦前までかなり起伏に富んだ雑木林であったらしい。ところが戦時中のイモ畑化と、昭和40年頃の基盤整備により現在のような平坦地になったとのことである。

この地域は主に弥生時代から古墳時代にかけての著名な遺跡が濃密に分布し、旧石器・縄文時代の遺跡は極めて希薄な地域として従来認識されてきた。弥生時代では、甕棺とそれに副葬された前漢鏡・ガラス璧・鉄剣・鉄戈・毛抜き形鉄器等が一括して国の重要文化財に指定されている東小田峯遺跡(夜須町)や、副葬品を多量に保有する隈・西小田遺跡(筑紫野市)の存在から、当時の首長もしくはそれに相当する支配者が生活していた地域であることが知られている。また多種類の鋳面を有する特異な鋳型が出土したヒルハタ遺跡(夜須町)、広形銅戈の鋳型が出土した仮塚南遺跡(筑紫野市)、広形銅鉾の鋳型が出土した津古遺跡Ⅰ地点(小郡市)、銅剣の鋳型が出土した乙隈天道町遺跡(小郡市)等からやはりこの地域でも青銅器生産が活発に行なわれたことを知ることができる。弥生時代の繁栄は古墳時代にも存続し、古墳時代初頭期の津古生掛古墳(小郡市)、古墳時代前期の三国の鼻古墳(小郡市)や国指定史跡の焼ノ峠古墳(夜須町)等の存在がそのことを物語っている。

さて先述したように、この地域は弥生・古墳時代に比べ旧石器・縄文時代の遺跡が極めて少なかった。しかし、最近の発掘調査の増加により、原田地区遺跡群・峠山遺跡(筑紫野市)での纏まった旧石器の出土、横隈山遺跡(小郡市)の国府型ナイフ形石器の出土、さらには向畔ヶ浦遺跡(小郡市)や梨ノ木遺跡(夜須町)において多数の縄文時代の陥し穴が確認され弥生時代以前の生活の痕跡が徐々にではあるが認識されはじめている。特に、宗原遺跡の北約350mで押型文土器が採集・報告された向福島遺跡(夜須町)をはじめ、地元在住の鬼木和憲氏や平田定幸氏等により宗原遺跡や向福島遺跡において尖頭器のみが採集されていた事実は実に興味深い。したがって、今回の調査でも当初から旧石器・押型文土器の出土が期待された。

片岡 肇「福岡県朝倉郡向福島出土の押型文土器」『九州考古学』33・34 1968

児玉真一編『乙隈天道町遺跡』福岡県教育委員会 1989

片岡宏二編『三国の鼻遺跡Ⅰ』小郡市教育委員会 1985

片岡宏二編『津古生掛遺跡Ⅱ』小郡市教育委員会 1988

石井扶美子編『慮木藪遺跡』夜須町教育委員会 1992

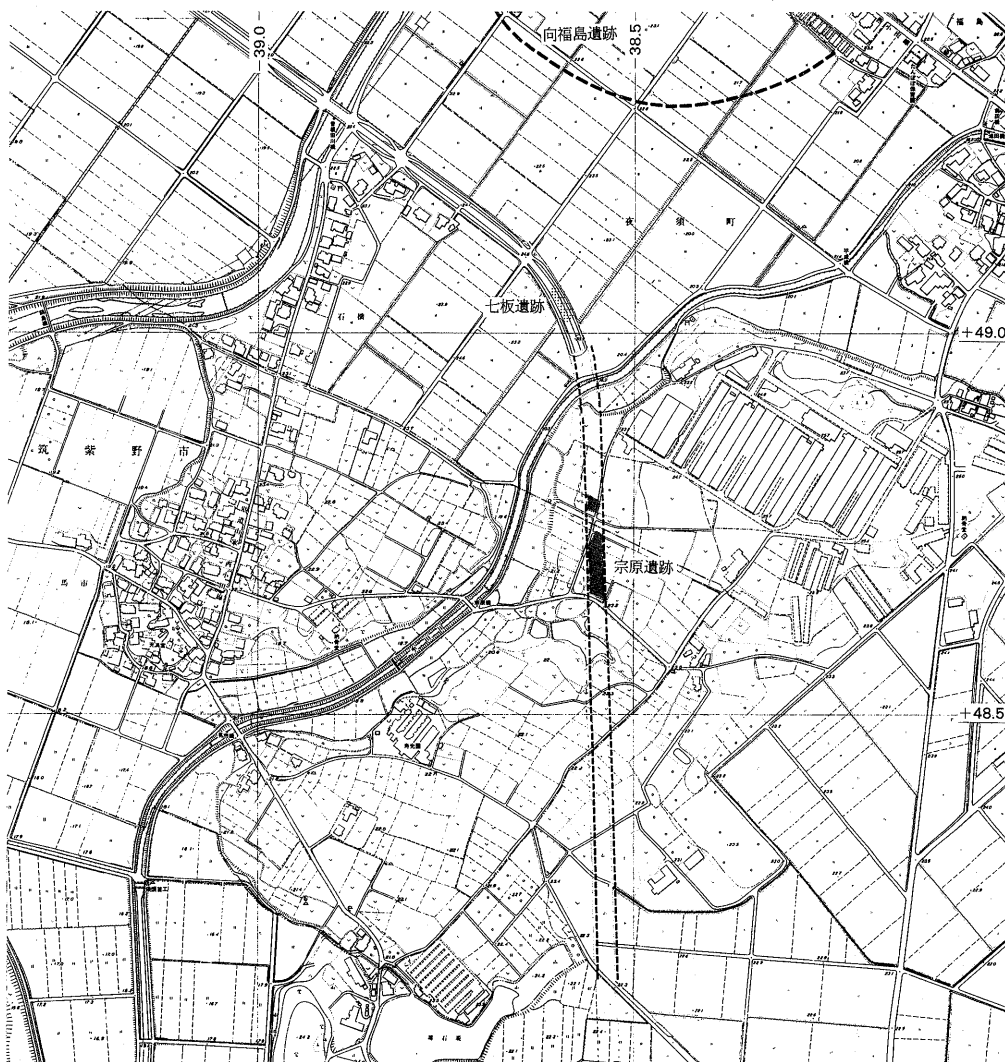
夜須町史編さん委員会編『夜須町史』夜須町 1991

Ⅱ 遺構と遺物

1. 旧石器時代の遺構と遺物

1) 調査の方法

宗原遺跡が発掘調査されることになった経緯は、先述したように平成4年度に実施された試掘調査で土壌・溝・ピット等が確認されたことと、その時弥生土器や須恵器の小片が採集されたことによる。また、以前からこの宗原遺跡や近接する向福島遺跡で角錐状石器や押型文土器が採集されており、比較的類似した段丘上に立地するという条件からも先史時代遺跡の確認が



第3図 宗原遺跡調査地点 (1/10,000)

当初予測された。

調査は重機による表土の除去作業から始め、第3層上面の検出を行なった。ところが、削平により部分的に第4層上面が剥き出しになった地点から旧石器が出土したため、以後の重機による作業は慎重を極めた。表土除去後、石器の遺存状況の確認を目的に筑紫野市側の南調査区に2×2mのグリッドを5箇所に入れたところ、第4層上面（第3層と第4層との境）からのみ石器の出土が面的に確認された。そこで、第4層上面が当該期の生活面であるという前提のもとに、南調査区に5×5mのグリッドを組み、この第4層上面を南調査区の全面に露出させ10cmの等高線測量図を作成することを調査の主目的とした。なお、南調査区の南端部では削平によりすでに第4層は若干消失しており、また夜須町側の北調査区は著しい削平によりこちらもすでに第6層ないしは第7層が剥き出しのため石器の遺存は望めなかった。

2) 層序 (第4図)

南調査区（筑紫野市側）では合計3箇所をトレンチ状に深く掘り下げ、各種の土層断面図を作成した。

土層図①は南調査区中央西端で作成したものである。ここでは表土から湧水の見られる第12層（暗褐色粗砂層）までの深さ2.7mを掘り下げた。石器の集中する調査区中央部から段丘下へ傾斜していく途中に当たるため、必ずしも良好な土層断面図とはいえないが、第2層黒褐色土が明瞭に残っていたので敢えてここを選択した。なお、火山ガラス特定のための土壌サンプルNo.10はこの土層断面の第2層から採集した。

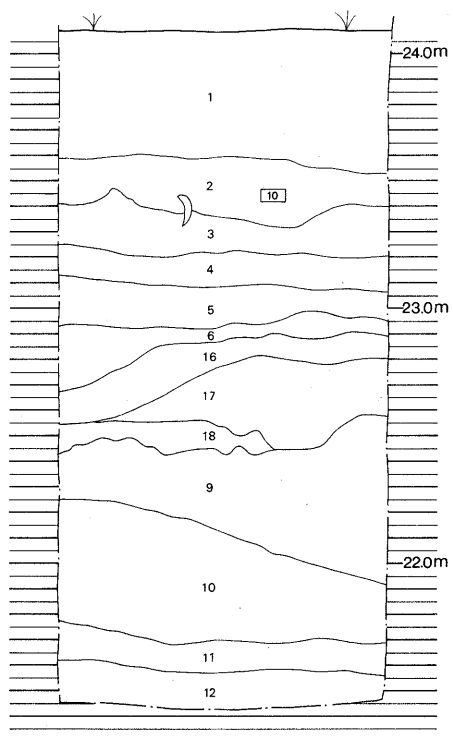
土層図②は南調査区のほぼ中央やや北寄り、石器や礫群の集中する付近に入れたトレンチにおいて作成した。ここでも第12層の湧水層まで掘り下げたが、第12層までの深さは土層図①の地点より約50cm浅く、土層図①付近がかなり下がっていることを示している。図示したようにAT火山灰（始良・丹沢火山灰）の降下時点を確認するための土壌サンプルNo.1～No.9はこのトレンチで採集された。

土層図③は土層図②より南側で南調査区を横断するように入れたトレンチで作成したものである。調査区の東側から西側へ向かって緩やかに傾斜していく様子が明瞭でわかりやすい。

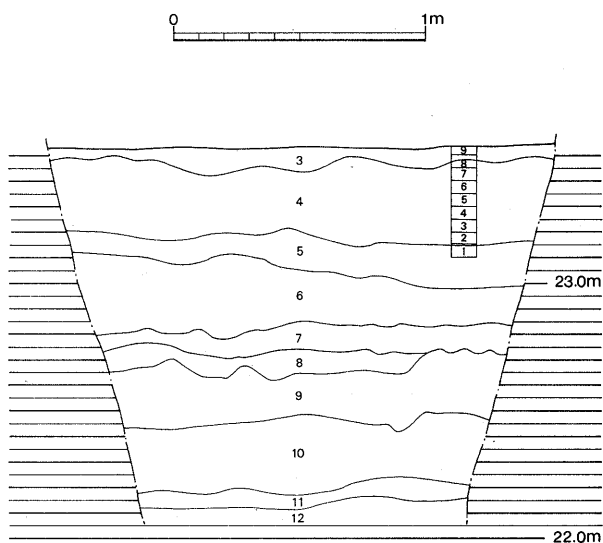
以下では基本層序について説明する。

第2層黒褐色土（黒ボク土）は鬼界-アカホヤ火山灰（K-Ah）を起源とする土壌といわれ、福岡県では筑後川北岸の小郡・筑紫野市から甘木市・朝倉町にかけて広く分布する。第Ⅲ章によればサンプルNo.10から多量の鬼界-アカホヤ火山灰の火山ガラスが確認されている。宗原遺跡では南調査区の中でも低く落ち込んだこの土層図①の周辺や、南東端の低地でのみ遺存する。遺物は全く含まないが、後述する縄文時代の陥し穴や弥生時代の土壌の埋土はこの黒褐色土である。

第3層淡褐色土は南調査区の南端部分を除いてほぼ全面に広がる。層厚は5～10cmと薄い

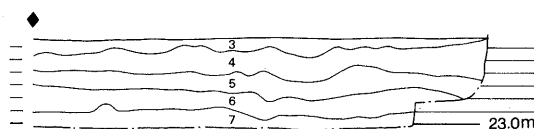
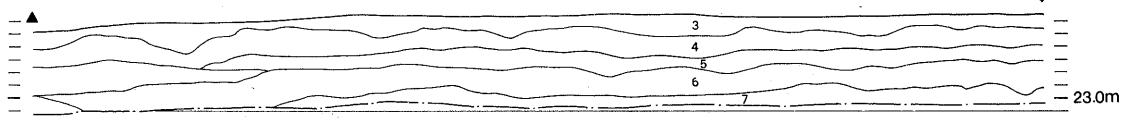
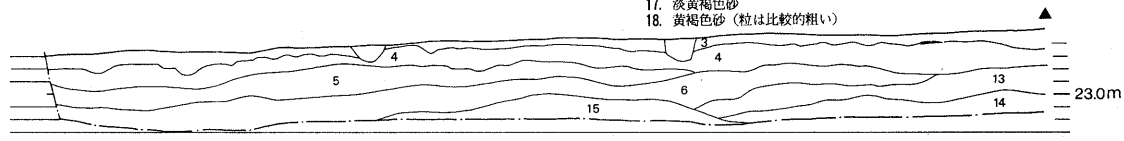


土層断面①



土層断面②

1. 表土
2. 黒褐色土
3. 淡褐色土
4. 淡黄褐色土
5. 黄褐色土
6. 黄褐色砂質土
7. 黄褐色粘質土
8. " (灰褐色細砂を均等に含む)
9. 灰褐色細砂 (黄褐色粘質土を均等に含む)
10. 灰褐色砂
11. 黒褐色砂
12. 暗褐色粗砂 (湧水)
13. 灰白色砂質土
14. 灰褐色砂質土
15. 暗黄褐色砂質土
16. 灰褐色細砂
17. 淡黄褐色砂
18. 黄褐色砂 (粒は比較的に粗い)



土層断面③

第4図 土層断面①～③実測図 (①・②は1/30、③は1/60)

が、第2層黒褐色土の遺存する土層図①では15～20cmほどの厚さが確認される。本来は全体にこの程度の厚さが遺存していたものと考えられる。遺物はほとんど含まないがただ1点第10図5が出土した。もっとも、この1点は石器や礫群の集中部から若干はなれていること、ならびに低く傾斜していく地点からの出土なので、はたしてプライマリーな状態で第3層に包含されたかどうか慎重な対応が必要であろう。

第4層淡黄褐色土も南調査区の南端部を除いてほぼ全体に層厚20～25cmで安定的に広がる。基本的には無遺物層であるが、石器や礫群はこの層の上面、つまり第3層と第4層との境において検出されたことに注目したい。特に、ある程度の接合が可能な焼礫群が第3層と第4層の境から半径1m弱の範囲内で面的に検出されたことは、第3層と第4層の境から出土した石器群の面的な広がり、かなりプライマリーな状態であったことを傍証するものである。第Ⅲ章によれば、土層図②に図示した土壌サンプルの分析によって、AT火山灰の含有率はサンプルNo.9で7.4%、No.8で3.4%、No.7で9.4%、以下No.6～1では4.2%未満という結果が得られ、第4層最上部（No.7）がAT火山灰降下層準であると結論づけられている。つまり、石器や礫群が検出された第4層上面の年代はAT火山灰降下時に極めて近い年代であると推察されよう。なお、第3層と第4層とは一見漸移層であるかのようにも見えるが、調査時点の所見としては、平面的にも土層断面においても両者は明確に区別・分層できるものであった。

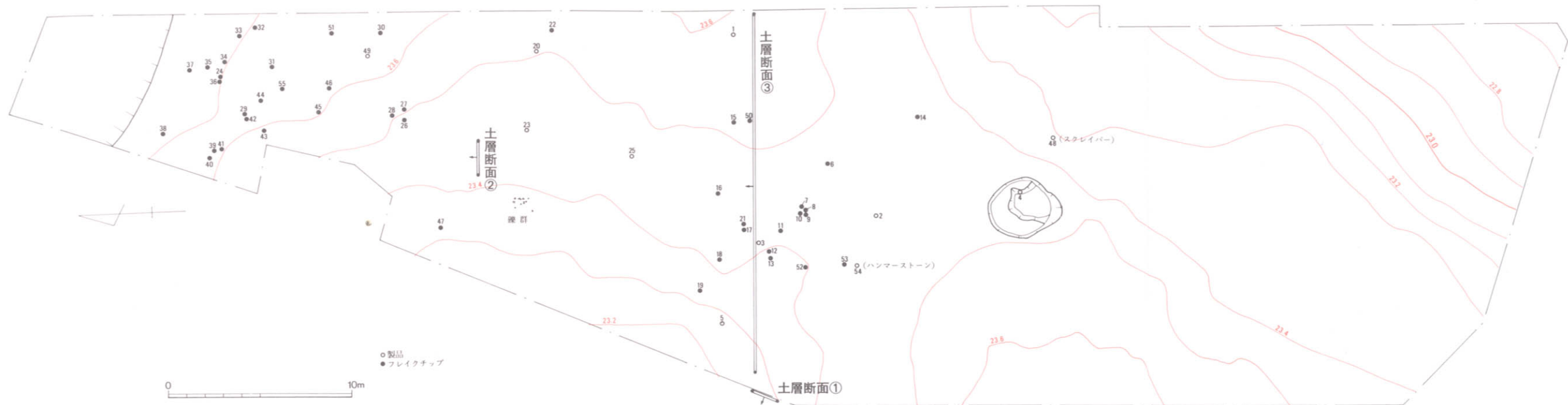
第5層黄褐色土もやはり無遺物層で、第3・4層とほぼ同ような広がりをみせる。

第6層より以下の層では細砂や粗砂が混在する層で、下位になるに従い砂は粗く層厚は厚くなる。第12層は段丘を構成する主体部に相当し、2～3mm程度の暗褐色粗砂層からは湧水が著しい。これ以上の掘り下げが困難なことから土層壁の崩落が心配されたため、この層の確認をもってトレンチの掘り下げを中止した。

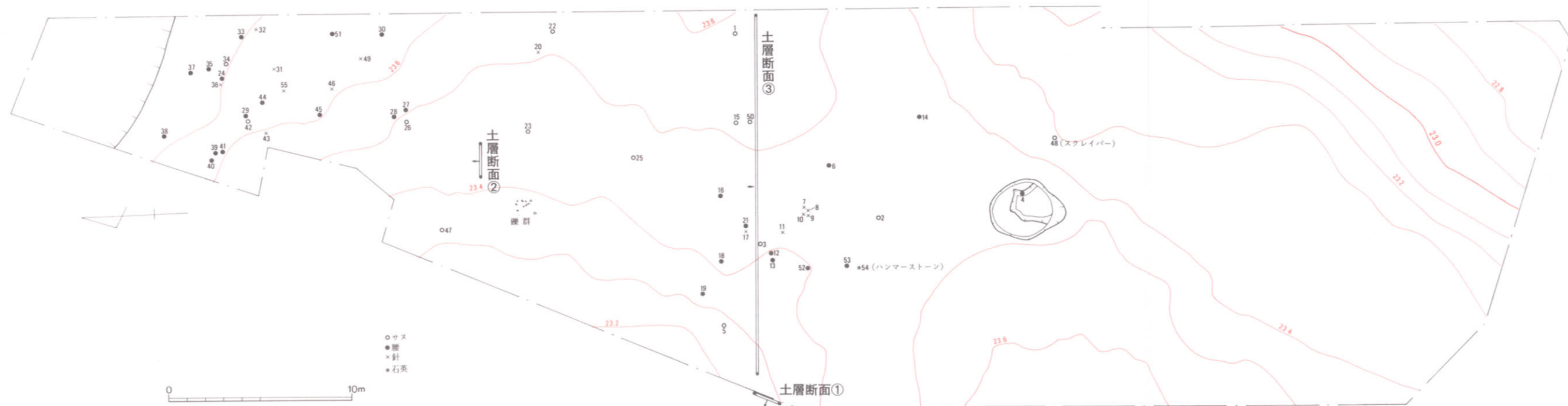
3) 遺物の出土状態（第5・6図）

遺物の出土状態の説明を行なう前に、第4層上面の地形について簡単に見ておきたい。第6図に示したように、南調査区では第4層上面を全面に亘って検出し、その段階で10cmの等高線を測量・作図した。その結果、南調査区の中央部付近は本遺跡において最も平坦な地形であり、土層図①の中央部西端や南調査区南東端へ向かって低く落ちていっていることが判明した。つまり、南調査区の北東－南西の方向に細い尾根状の微高地が存在し、主な石器はその上に分布していることになる。

さて、宗原遺跡で出土・採集した石器は59点と少ないが、そのうち8点までが角錐状石器という特異な状況を示す。第5図にはそれらの出土分布と第4層上面の10cm等高線を示しているが、これによると石器は南調査区の中央付近から北側に広がり分布することがわかる。中でも、製品については調査区の中央部で本遺跡にあっては最も平坦な地点に集中して分布していることが注目される。チップについてはその多くが南調査区の北端部に集中しており、製品とは異



第5図 石器出土分布図 (1/250)



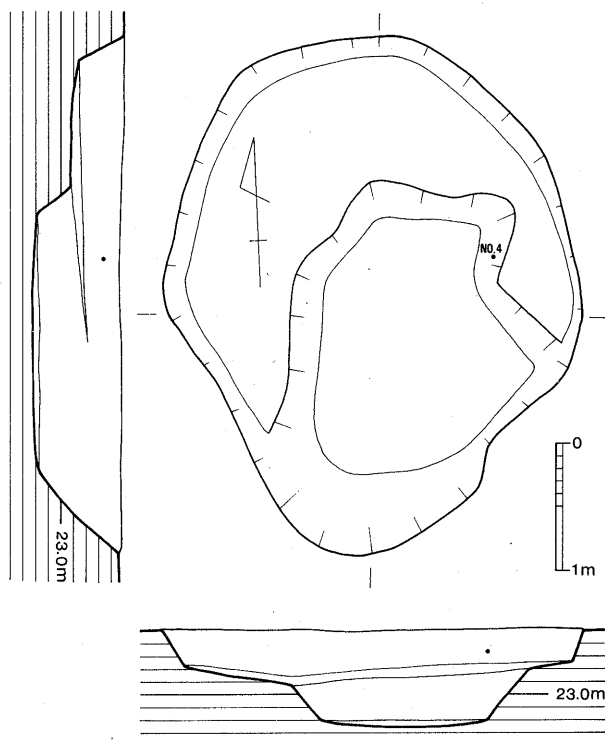
第6図 石器石材別出土分布図 (1/250)

なった分布状況みせるが、こういった事象をどのように理解するかが問題である。製品である石器群の性格にも係わってくることで、今後慎重な検討を要したい。

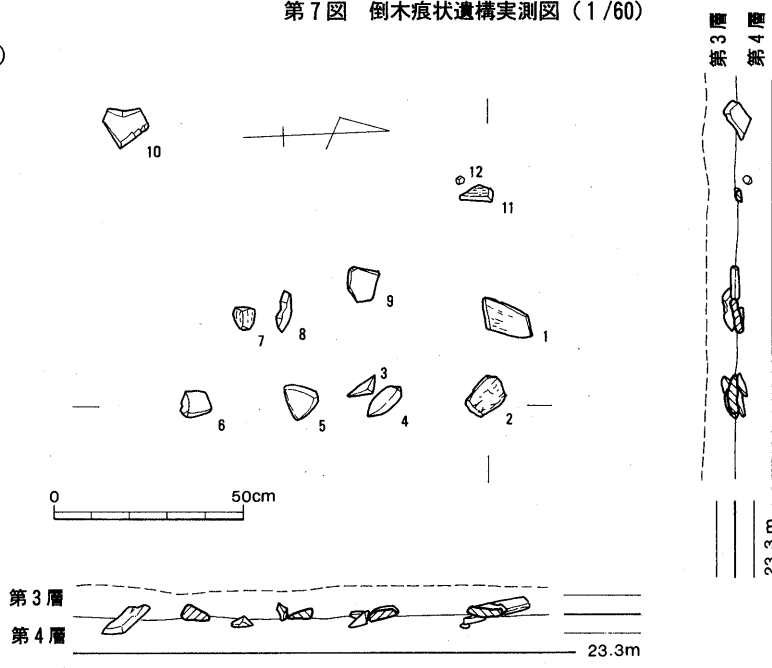
第10図5は先述したように第3層中からの出土であり、その取り扱いには注意を払いたい。第10図4は倒木痕（第7図）の中位からの出土である。この倒木痕は南調査区の中央やや南よりに位置し、 $4.0 \times 3.2 \times 0.7\text{m}$ の規模を有する。また、第6図では石器の石材別の分布状況を示したが、同一の石材からなる石器が部分的に集中する傾向は必ずしも窺えず、各種石材が満遍なく分布しているように見てとれる。

4) 礫群（第8図）

礫群は南調査区の中央部やや北寄りの地点で検出された。石器群と同様に第3層と第4層の境に面的に径約1mの範囲で広がり、ある程度の接合が可能である。また接合できなくとも、明らかに同一の母岩と認定できるものもあり、12点からなる礫群も実際には5種類の母岩か



第7図 倒木痕状遺構実測図（1/60）



第8図 礫群出土状況実測図（1/20）

らなる。すなわち、2・3・5・6・7・11は同一母岩でこのうち2と11は接合、8と10は接合、1と9は同一母岩、4と12は単独、の5種類である。また、いずれの礫にも淡赤褐色や青灰色への変色やクラックが観察され、加熱を受けたものと考えられるが、普通検出される焼礫群に比べてその点数の少なさが特徴的である。

5) 出土遺物 (第9～12図)

出土遺物の総数は55点を数える。そのほとんどは第3層と第4層との境からの出土で、角錐状石器7点(1点は未製品)、削器1点、敲石1点、使用痕ある不定形石器1点、使用痕ある剥片2点、剥片・碎片42点からなる。この他に、第10図5の尖頭器は第3層出土、第1表56～59は表土の除去中に採集されたものである。

角錐状石器 (第9図1・2・3・20・25～第10図4・23・57)

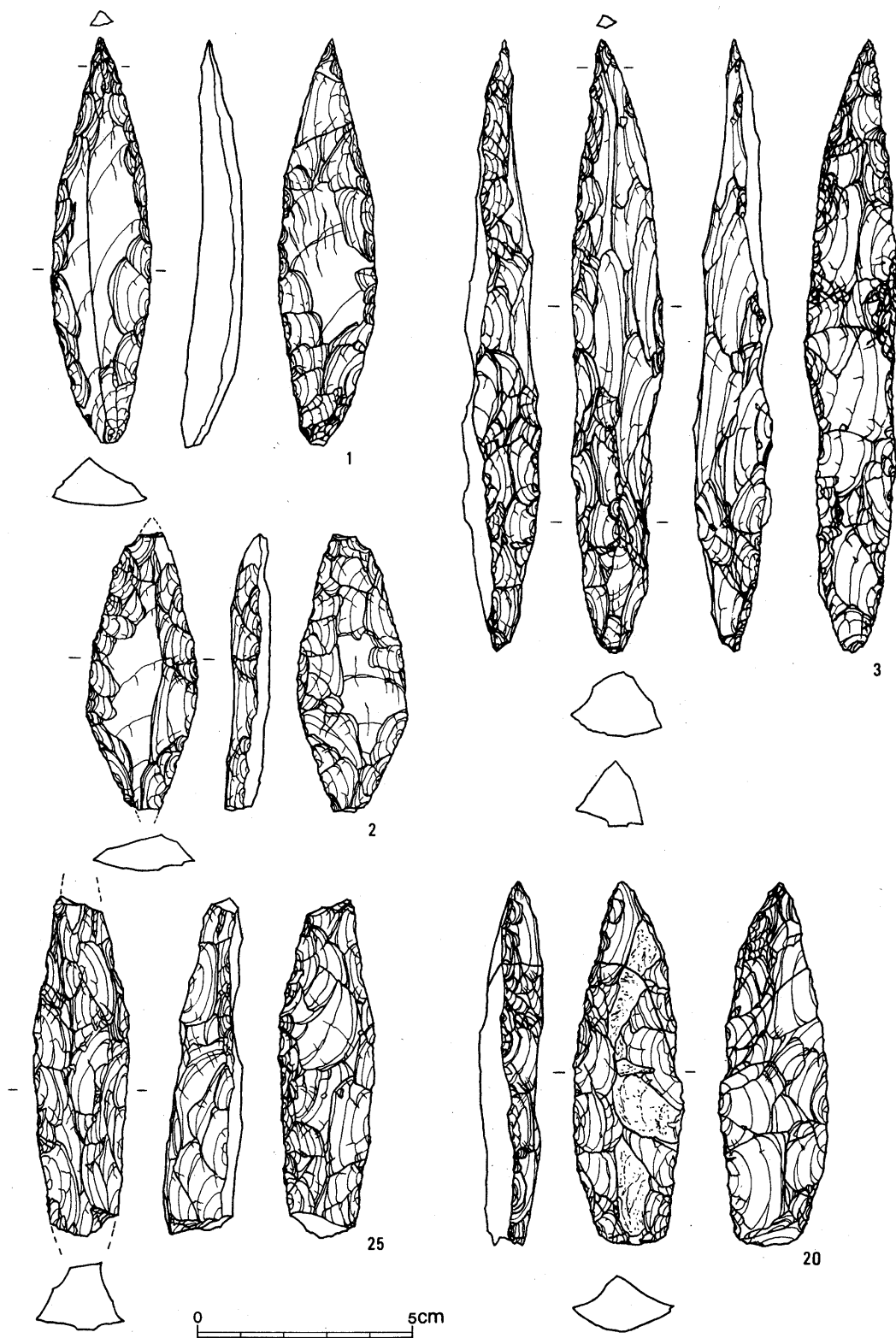
1はサヌカイトの縦長剥片を素材としており、打面を残す。背面には大きく2面、ネガティブな剥離面とポジティブな剥離面が残されている。ネガ面の剥離方向は、腹面の剥離方向とほぼ同じである。背面のポジ面は、大型の剥片石核より素材剥片が剥離された可能性を示す。この背面のネガ面とポジ面より形成される稜が、石器の形態を決定する背面の一稜となる。調整加工は全周に及び、特に先端部については入念で、一部稜上より調整を行なっている。断面の形態は三角形をなす。

3はサヌカイト製で、本遺跡出土資料にあっては最大の長さ14.10cmを測る。背面の一部に素材段階の剥離面を残すが、加工が進んでいるため、素材剥片の形状は不明である。調整加工は石器の全面に及んでおり、背面については急角度の剥離が行なわれている。先端部付近は素材段階の剥離面より形成される稜を、そのまま石器の背面の一稜としている。また、特に左側縁に調整が集中するのは、主軸の修正と断面の三角形という形態を意図したためと考えられる。下端部付近に急角度の剥離が著しいのは、素材の幅を減じながら成形することを目的としたためであろう。基部は下端部より加撃されている。三角形という断面の形態から所謂「三稜尖頭器」の典型といえる。

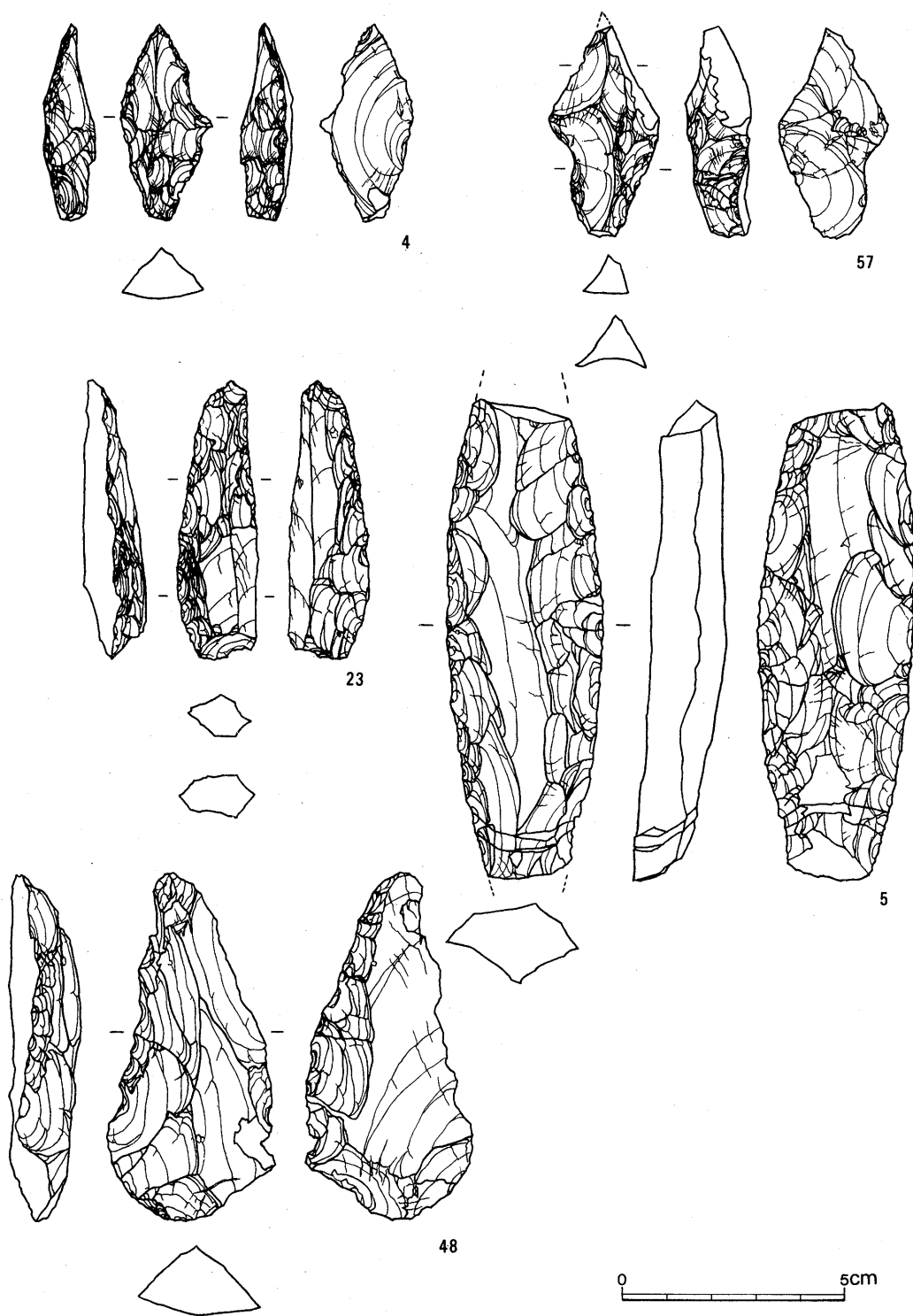
2はサヌカイトの薄い縦長剥片を素材としている。右側縁には、左側縁より角度の大きい調整が行なわれている。そして、背面の大きなネガ面と一稜を形成する。左側縁には細かい調整加工が行なわれる。左右がやや非対称的な調整となるのは、右側縁については石器の成形を、左側縁については側縁の補強をそれぞれ意図したためであろう。基部は入念に作出されている。断面は三角形を呈し、先端部と下端部欠損。

25はサヌカイト製で急角度の調整加工が行なわれている。断面は一部三角形を呈し、先端部と下端部を欠損するが、本来は3と同じ形態であったと考えられる。

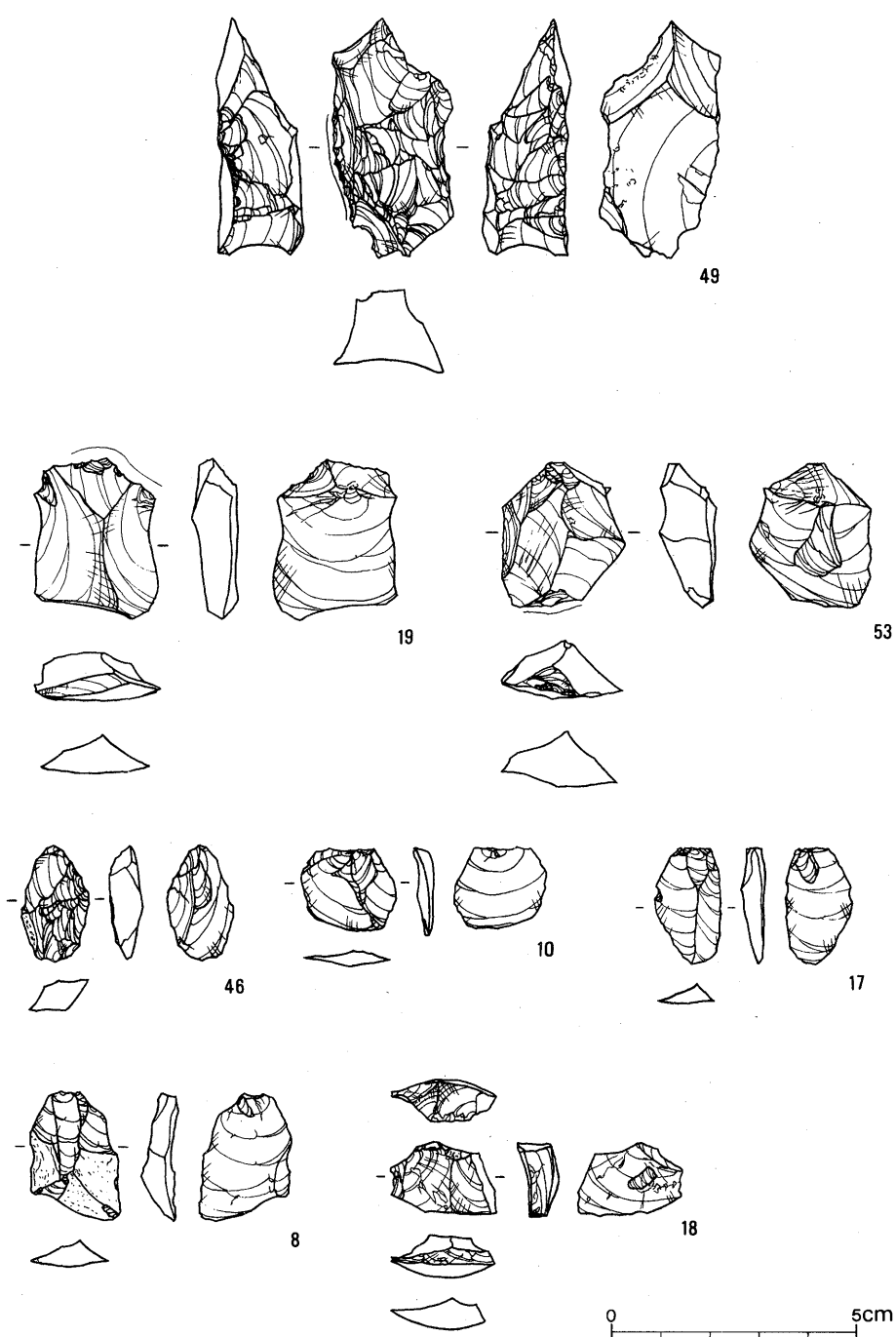
20は針尾島産黒曜石製。左側縁はやや角度のある剥離によって大きく調整されるが、右側縁はそれに比べて細かい。これら両側縁からの調整によって得られる稜が、石器の形態を決定し



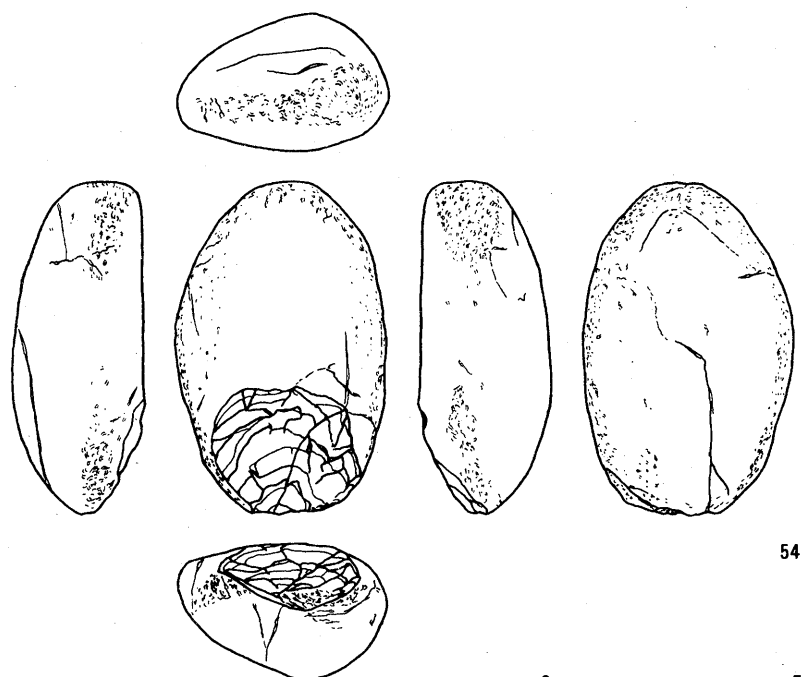
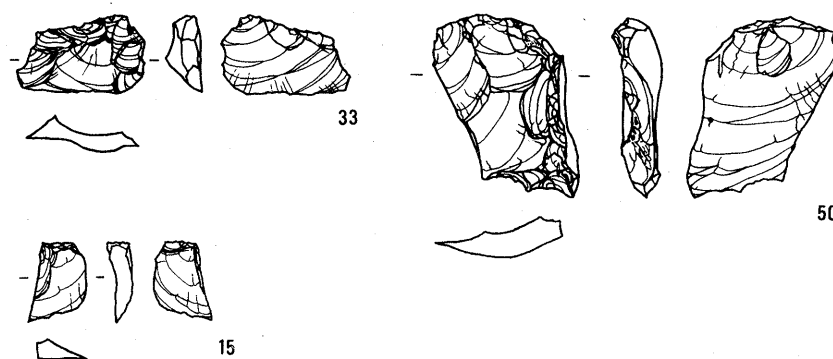
第9圖 石器実測圖1 (2/3)



第10图 石器实测图2 (2/3)



第11图 石器实测图3 (2/3)



0 5cm

第12图 石器实测图4 (2/3)

第1表 宗原遺跡出土石器観室表

No	器 種	石 質	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備 考	挿図
1	角錐状石器	サヌカイト	9.40	2.35	1.55	20.30		9
2	角錐状石器	サヌカイト	(6.35)	2.60	1.10	14.90	先端・下端欠	9
3	角錐状石器	サヌカイト	14.10	2.25	1.85	46.60		9
4	角錐状石器	腰岳産黒曜石	4.35	2.10	1.25	6.80		10
5	尖頭器	サヌカイト	(10.55)	3.35	2.05	67.20	先端・下端欠	10
6	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	0.80	1.15	0.35	0.50		12
7	剥片・碎片	針尾島産黒曜石	(0.9)	1.45	0.25	0.20	先端・下端欠	
8	剥片・碎片	針尾島産黒曜石	2.60	1.80	0.75	2.30		11
9	剥片・碎片	針尾島産黒曜石	1.45	0.70	0.30	0.30		
10	剥片・碎片	針尾島産黒曜石	1.65	2.00	0.45	1.40		11
11	剥片・碎片	針尾島産黒曜石	1.30	2.00	0.30	0.40		
12	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	1.50	1.25	0.60	1.20	原礫面残	
13	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	2.15	1.45	0.55	1.30		
14	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	0.70	0.95	0.20	0.10		
15	剥片・碎片	サヌカイト	1.50	1.35	0.50	0.60		12
16	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	(1.45)	0.70	0.40	0.30	上端・下端欠	
17	剥片・碎片	針尾島産黒曜石	2.35	1.40	0.45	1.20		11
18	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	1.50	2.40	0.90	2.50		11
19	使用痕ある剥片	腰岳産黒曜石	3.25	2.53	9.50	6.90		11
20	角錐状石器	針尾島産黒曜石	8.45	2.60	1.35	28.70		9
21	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	(1.05)	0.95	0.60	0.50	先端・左側縁欠	
22	剥片・碎片	サヌカイト	2.10	1.65	0.70	2.10		
23	角錐状石器	サヌカイト	(6.15)	1.85	1.45	14.80	未製品	10
24	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	1.45	(0.90)	0.30	0.20	左側縁欠	
25	角錐状石器	サヌカイト	(7.85)	2.30	2.40	29.80	先端・下端欠	9
26	剥片・碎片	サヌカイト	2.65	3.85	1.30	9.60		
27	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	(0.70)	1.25	0.15	0.20	先端欠	
28	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	1.80	0.50	0.45	0.40		
29	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	2.20	2.65	0.95	3.10		
30	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	0.65	0.75	0.55	0.30		12
31	剥片・碎片	針尾島産黒曜石	1.05	1.55	0.65	0.70		
32	剥片・碎片	針尾島産黒曜石	(2.60)	3.85	1.00	6.30	下端欠	
33	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	1.55	1.60	0.70	1.60		12
34	剥片・碎片	サヌカイト	3.45	3.80	1.10	11.10		
35	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	1.55	1.55	0.40	0.50		
36	剥片・碎片	針尾島産黒曜石	2.15	1.50	0.30	0.80		
37	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	1.40	1.70	0.35	0.60		
38	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	1.10	1.85	0.25	0.30		
39	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	(1.30)	1.70	0.35	0.50	下端欠	
40	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	1.80	1.55	0.40	0.80		
41	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	(0.80)	1.60	0.45	0.60	下端欠	
42	剥片・碎片	サヌカイト	2.15	1.95	0.75	1.40		
43	剥片・碎片	針尾島産黒曜石	2.05	1.25	0.25	0.50		
44	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	1.40	1.45	0.35	0.80		
45	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	1.15	1.45	0.30	0.30		12
46	剥片・碎片	針尾島産黒曜石	1.45	2.35	1.20	1.70		11
47	剥片・碎片	サヌカイト	1.45	1.70	0.95	1.70		
48	削器	サヌカイト	7.75	4.80	1.65	36.80		10
49	使用痕ある不定形石器	針尾島産黒曜石	4.85	2.55	1.90	18.20		11
50	剥片・碎片	サヌカイト	3.75	2.80	1.05	8.30		12
51	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	(1.80)	1.65	0.40	0.70	下端欠	
52	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	3.15	1.60	1.00	3.60	原礫面残	
53	使用痕ある剥片	腰岳産黒曜石	2.40	2.50	1.15	6.20		11
54	敲き石	石英	6.60	4.25	2.65	98.70		12
55	剥片・碎片	針尾島産黒曜石	1.05	1.90	0.55	0.90		
表 採								
56	使用痕ある剥片	腰岳産黒曜石	(2.80)	2.85	1.05	5.10	原礫面残、先端欠	
57	角錐状石器	腰岳産黒曜石	(4.70)	2.55	1.50	10.20	先端欠	10
58	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	3.10	2.70	1.60	9.30	全面ガジリ	
59	剥片・碎片	腰岳産黒曜石	1.55	1.40	0.40	0.60		

第2表 宗原遺跡出土石器組成表

器 種	点数	腰岳産黒曜石 (g)	針尾島産黒曜石 (g)	サヌカイト (g)	石英 (g)
角錐状石器	7	1 (6.8)	1 (28.7)	5 (126.4)	—
削器	1	—	—	1 (36.8)	—
敲石	1	—	—	—	1 (98.7)
使用痕ある不定形石器	1	—	1 (18.2)	—	—
使用痕ある剥片	2	2 (15.7)	—	—	—
小 計	12	3 (22.5)	2 (46.9)	6 (163.2)	1 (98.7)
剥片・碎片	42	23 (20.9)	12 (16.7)	7 (34.8)	—
合 計	54	26 (43.4)	14 (63.6)	13 (198.0)	1 (98.7)

ている。先端部の調整は背面側からの対向剥離によって、腹面側の先端部に稜を求めており、断面の形状は逆三角形。背面左側縁の剥離が大きく右側縁に及んだため、右側縁からの調整が困難であったためと考えられる。基部は欠損。

4は腰岳産黒曜石の縦長剥片を素材としている。背面先端部の稜は、素材の剥片剥離が行なわれる以前に剥離された二面よりなる。右側縁に大きく急角度の剥離が連続するのは、素材剥片剥離の段階で得られた稜に対し、左右対称になるような修正を目的としたためであろう。基部は両側縁ともに急角度の剥離が行なわれ、また一部に稜上剥離も見られる。先端部周縁には細かい剥離が連続している。断面は三角形で、下端に自然面を残す。

57は表採資料で腰岳産黒曜石製である。左側縁は急角度の大きな二つの剥離面からなる。これに対し、右側縁はやや観察しづらいが、先端方向より加撃され剥離が行なわれている。これが素材剥片剥離以前の剥離面であるかは不明である。石器の軸は左側縁の先端部側の剥離によって決定されており、切り合い関係から見ても左側縁の方が新しい。基部は細かい調整によって作出されており、一部稜上剥離も行なわれている。断面は一部台形に近くなるがおおよそ三角形で、下端部に自然面を残す。

23はサヌカイト製であるが、素材の形態は不明。ほぼ同一の方向から剥離された面が、少なくとも二面はある。左側縁に加工が著しく、幅を減じながら右側縁と平行に近い形態に仕上げようとした意図が窺える。右側縁は先端部に調整が集中するが、これは尖頭部の作出と稜の形成を意図したためであろう。ただし、尖らすまでには至っていない。基部の左側縁には、下端方向からの調整が入念に行なわれるが、右側縁には行なわれていない。これらの観察より、本石器は角錐状石器の未製品と考えられる。

尖頭器（第10図5）

5は第3層より出土したサヌカイト製の尖頭器である。背面には素材段階の大きな剥離面を残すが、これがネガ面かポジ面かは断定できない。左右の両側縁ともに細かい調整加工を行ない、基部に向かうにつれて入念で、基部にはノッチ状の大きな剥離が行なわれている。

削器（第10図48）

48はサヌカイト製の横長剥片を素材としている。左側縁の刃部は主要剥離面からの剥離によって作出される。右側縁については、素材の「底面」となる面から刃部の加工が施される。下端部には背・腹両面から交互に剥離が行なわれ、先端部にも加工を施す。つまり、刃部の加工は両側縁が主となるが、全周に加工が及んでいることになる。

使用痕ある不定形石器（第11図49）

49は針尾島産黒曜石製である。素材の大きなネガ面を打面とし、連続的に剥離を行なっているが、目的剥片が剥離された可能性は少ない。左側縁には使用痕と考えられる微細な剥離痕が連続している。スクレイパーとして使用されたのであろうか。

使用痕ある剥片（第11図19・53）

出土した剥片の中には、微細な剥離痕を連続させるものがある。これらの剥離痕は、剥片がそのまま何らかの目的のために使用された結果と考えられる。19は腰岳産黒曜石製の剥片で、先端部付近と右側縁下端部付近に連続する微細な剥離痕が観察される。53も同じく腰岳産黒曜石製の剥片で、左側縁下端付近ならびに下端に連続的な微細剥離痕が観察される。

剥片・碎片（第11図8・10・17・18・46、第12図6・15・30・33・45・50）

第11図8・10・17・18・46および第12図6・15・30・33・45・50は本遺跡で出土した主な剥片である。いずれの剥片も背面には主要剥離面と同一方向の剥離面を残し、また使用痕は観察されない。素材剥片としての可能性も乏しく、したがって加工の際の調整剥片と考えられる。8・10・17・46は針尾島産黒曜石製、6・18・30・33・45 腰岳産黒曜石、15・50はサヌカイト製。33は剥片末端が主要剥離面側に内弯している。比較的大きく、成形段階の剥片であろう。18の剥片は厚く剥離されており、同じく成形段階のものと考えられる。50はサヌカイト製の剥片で、右側縁のネガ面と打面に加撃痕を残す。ネガ面から推察すれば、ほぼ全周に亘り求心的に剥片剥離が行なわれているようでもある。右側縁と打面の観察から、特に稜上を意識して剥片剥離を行なった可能性がある。得られた剥片は15のようなものであったろうか。しかし、この剥片は背面剥離の後に剥離されており、石核ではなくむしろ大形調整剥片と考えられる。

敲石（第12図54）

54は石英製の敲石である。敲打痕は楕円礫の両端に集中的に観察され、一部側縁にまで及んでいる。下端の剥離面の側縁には、さらに敲打痕が集中しており、この部分を使用して細かい調整も行なったと考えられる。

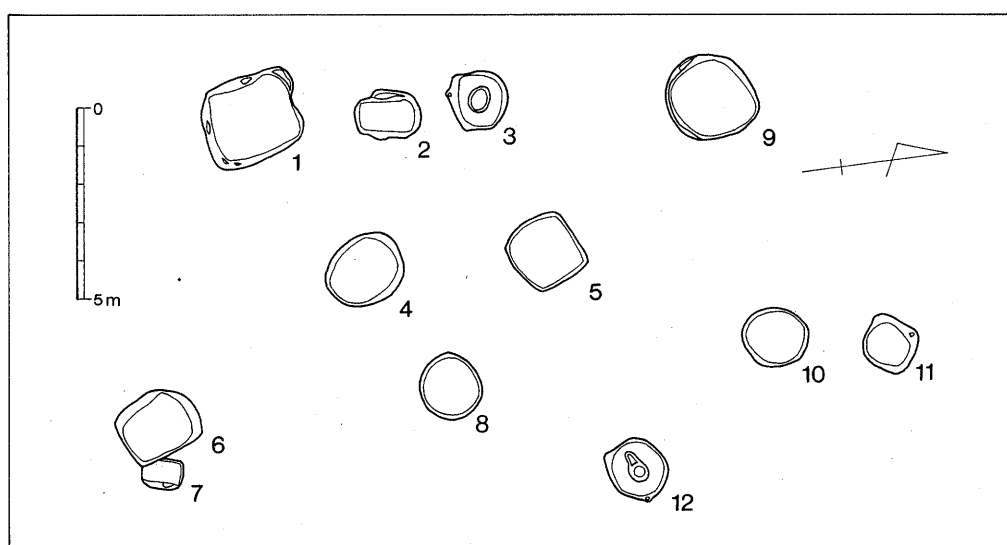
小結

宗原遺跡出土石器群の最大の特徴としては、まず何といても石器組成の単純性があげられよう。従来、角錐状石器の出土する遺跡においては、ナイフ形石器、台形石器、剥片尖頭器等が程度の差こそあれ、必ずと言ってもよいほど組み合わせ（共伴）として検出されてきた。しかし先述してきたように、今回の調査で得られた示準的な器種は角錐状石器に限られる。また、この宗原遺跡や近接する向福島遺跡で以前より採集されていた石器も角錐状石器だけである。これらの事実から推察されることには、(1)特定の器種が積極的に機能しうる生活がこの宗原遺跡一帯に存在したという可能性（例えばキルサイト等）、(2)ナイフ形石器文化期に角錐状石器だけで石器群が構成される時期が存在したという可能性、といった2点が主に上げられる。ただし、(2)については他の遺跡の状況や従来の研究からみて、積極的に肯定できる内容ではない。

ところで、先述したように、出土した角錐状石器7点は様々な形態のヴァリエーションによって構成される。このヴァリエーションの多様性に対する解釈としては、一般的には地域差や時間差が問題とされる。しかし、焼礫群と共に角錐状石器が面的に検出される状況や、調査

以前の採集品が角錐状石器に限定されるという事実から判断すれば、これらの多様なヴァリエーションは同一時期の所産と考えるのが最も妥当な解釈である。つまり、宗原遺跡では外形的に異なる角錐状石器を同時に製作・使用していたということになるのである。ただし、断面形状や先端部の作出状況については、技術的方向性が共通していると考えられるだけに、こういった技術的な共通性と外形的な多様性をどのように評価・判断するかが今後の課題となる。これについては詳しく後述したい。

石材別の総量は、腰岳産黒曜石43.4g、針尾島産黒曜石63.6g、サヌカイト198.0g。また、製品の石材全体に占める割合は、サヌカイトが最も多く163.2gで82.4%。サヌカイト石材における剥片等の割合は34.8gで17.5%、腰岳産黒曜石は20.9gで48.1%、針尾島産黒曜石は16.7gで26.25%となる。



第13図 1～12号土坑配置図 (1/200)

3. 縄文時代以降の遺構と遺物

縄文時代以降に属する遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構2基、弥生時代の性格不明土坑10基、昭和前半期の溝1本の他に、所属年代不明のピットからなる。以下では、土坑、溝、その他の遺構と遺物の順で説明を加える。

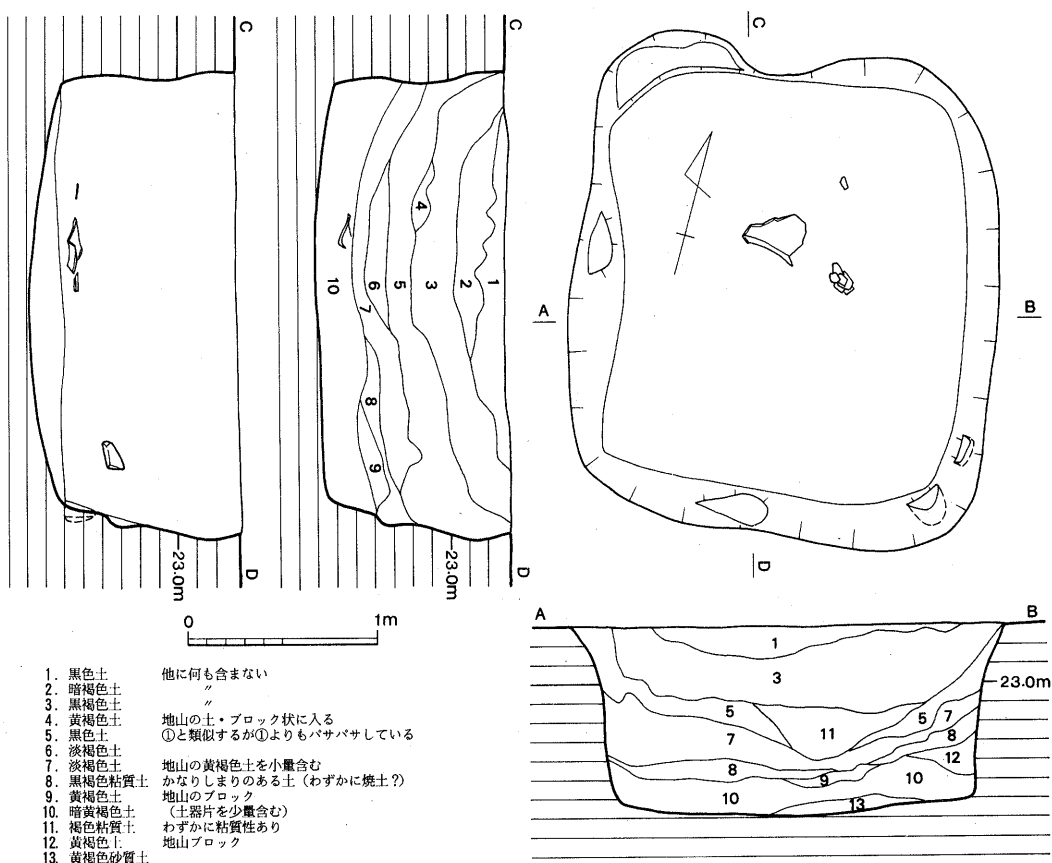
1) 土坑 (第13図)

土坑は南調査区の南側に集中する状態で12基検出された。この中には縄文時代の陥し穴と考えられるものも2基(2号と7号)も含まれるが、他の10基についてはいずれも弥生時代後期初頭に位置づけられる性格不明の土坑である。なお、これらの土坑が何らかの規則性に基づいて配列された形跡は全く窺えなかった。

1号土坑（第14図）

1号土坑は調査区南西端に位置し、平面・底面プランはいずれも限丸方形を呈する。規模は12基ある土坑群中最大規模の2.6×2.3×1.0mを測る。埋土は宗原遺跡基本土層第2層の黒褐色土（黒ボク土）がほとんどで、一部壁の崩落と考えられる黄褐色土が間層として入り込む。自然堆積の状況を呈しており、遺物は第15図に示した弥生土器1個体分が底面付近で検出されただけで他にない。土坑の壁には凹凸が存在するが、これは明らかに崩落したものと人為的に階段状に掘り込んだものとに分けられる。埋土は自然堆積であること、底面に何ら付帯遺構が存在しないこと、遺物が極めて少ないことなどから、本遺構が貯蔵穴や陥し穴や墓である可能性は低く、現時点では性格不明の遺構と言わざるをえない。

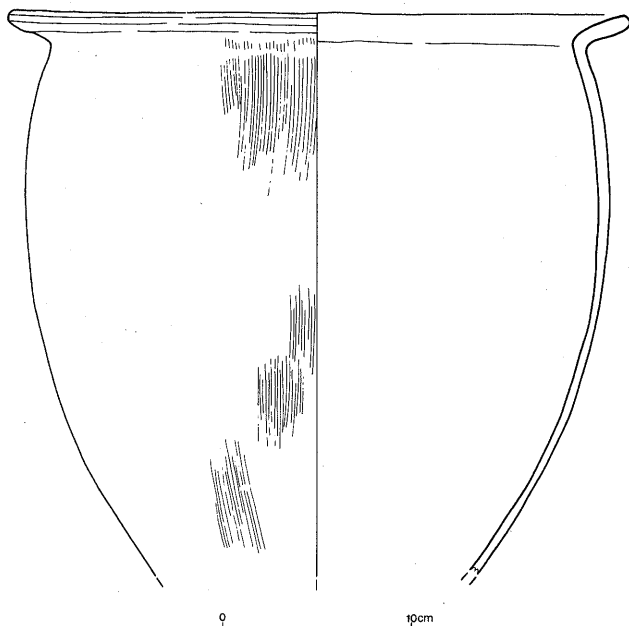
遺物は第15図に示した弥生後期初頭期の甕1個体分だけである。復原口径約33cm、残器高約30cmを測り、全体の約1/4が残存する。外面には縦方向のハケ目が施され、内面はナデられる。



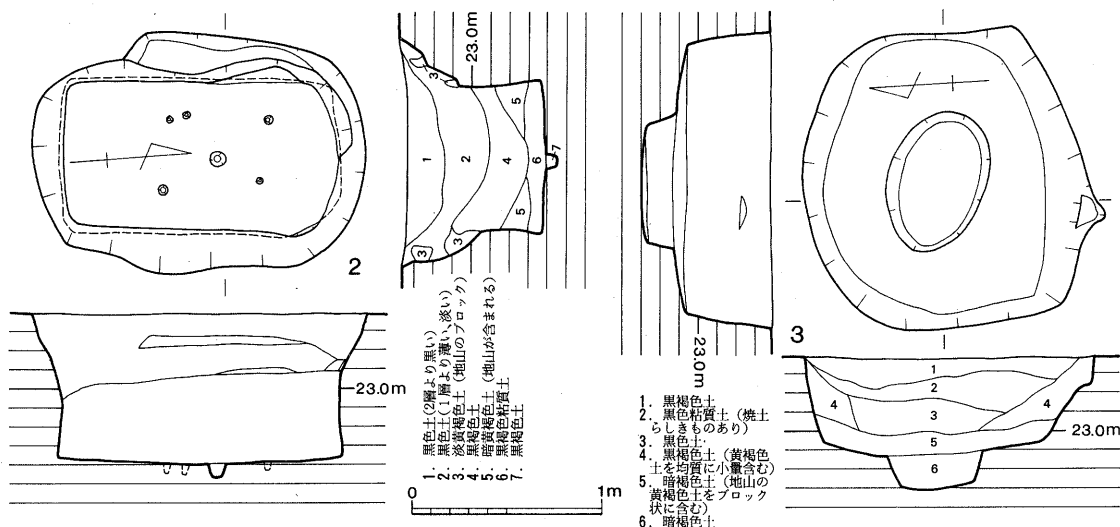
第14図 1号土坑実測図（1/60）

2号土坑（第16図）

1号土坑の北2mに位置する。平面プランは隈丸方形、底面プランは長方形を呈し、1.76×1.24×0.7mの規模を有する。本来は平面プランも長方形に近いものであったことが、壁の崩落が明瞭な土層の観察から判断される。壁は直線的に立ち上がるのではなく、底面へ向けて裾広がり状になる。底面にはほぼ中央付近に径8cm、深さ8cmの小ピットが1つ掘られ、それを取り囲むように5つのさらに小さいピットが掘られる。これら5つのピットについては、掘ってできた穴というよりも、何か棒状のものを突き刺してできたような感じに見てとれる。2号土坑も黒ボク土が自然堆積の状態で埋まり、また遺物が全く含まれないことから1号土坑と類似した様相を呈している。しかし、全体のプランと底面に見られる小ピットの存在から、一般的に縄文時代の陥し穴と呼ばれる遺構に相当する可能性が極めて高い。



第15図 1号土坑出土土器実測図（1/4）



第16図 2・3号土坑実測図（1/40）

3号土壌 (第16図)

3号土壌は2号土壌の北1mに位置する。1.6×1.5×0.5mの大きさで、円形と方形が半分ずつ組み合わさったような不定形なプランを呈する。底面中央部には76×56×18cmの楕円形の比較的浅いピットが掘られるが、土壌の底面およびこのピットには黒ボク土とは異なる褐色の土が入る。埋土は自然堆積で遺物は含まれず、1号土壌と同様にその性格は不明である。

4号土壌 (第17図)

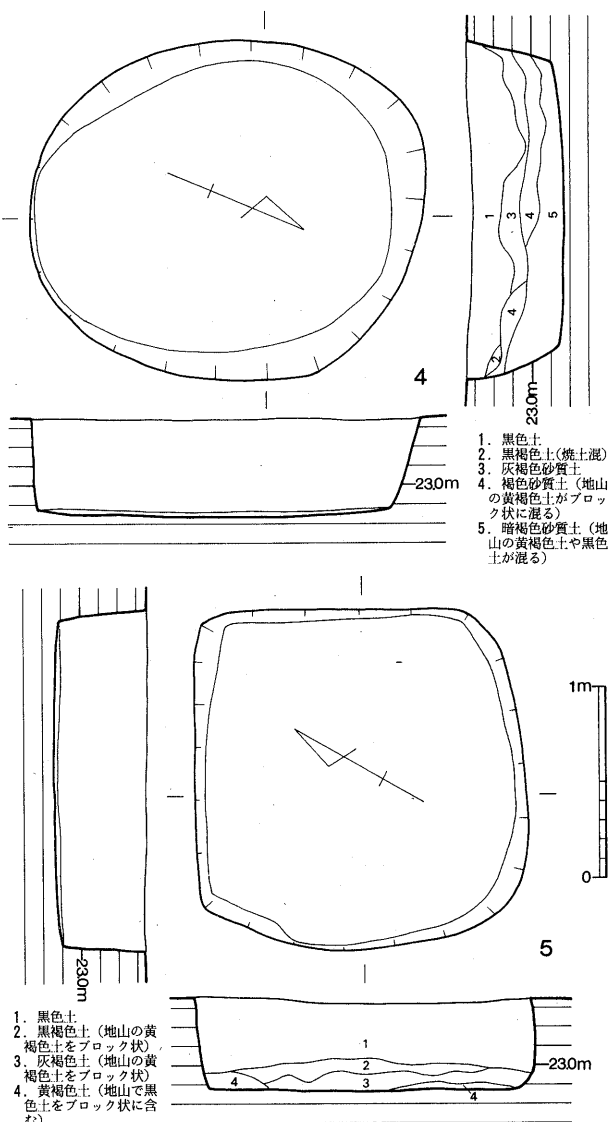
4号土壌は土壌群の中でも中央やや南寄りに位置し、1号土壌の北東約4mにある。2.1×1.8×0.5mの円形に近い平面プランを呈する。底面付近では地山の黄褐色土と黒ボク土とが混在するように堆積するが、やはり遺物は全く含まれない。壁は直線的ではなく、比較的緩やかに開きながら立ち上がる。この土壌も性格は不明。

5号土壌 (第17図)

5号土壌は土壌群のほぼ中央部に位置する。規模は1.8×1.8×0.5mを測り、正方形に近い平面プランを呈する。底面付近ではやはり地山の黄褐色土と黒ボク土とが混在するように堆積しており、遺物は全く含まれない。壁の立ち上がりは他の土壌に比べてやや直線的に立ち上がるが、埋土の堆積状況は自然堆積である。

6号土壌 (第18図)

6号土壌は7号土壌と切り合い関係を有する土壌で、土壌群の中では最も南に位置する。平面プランは2.1×1.6mの隈丸方形で深さ0.7mを測るのに対し、底面プランは1.8×1.2mの長方形プランである。基本的に埋土は自然堆積だが、3層とした黒褐色土には焼土らしき暗赤褐



第17図 4・5号土壌実測図(1/40)

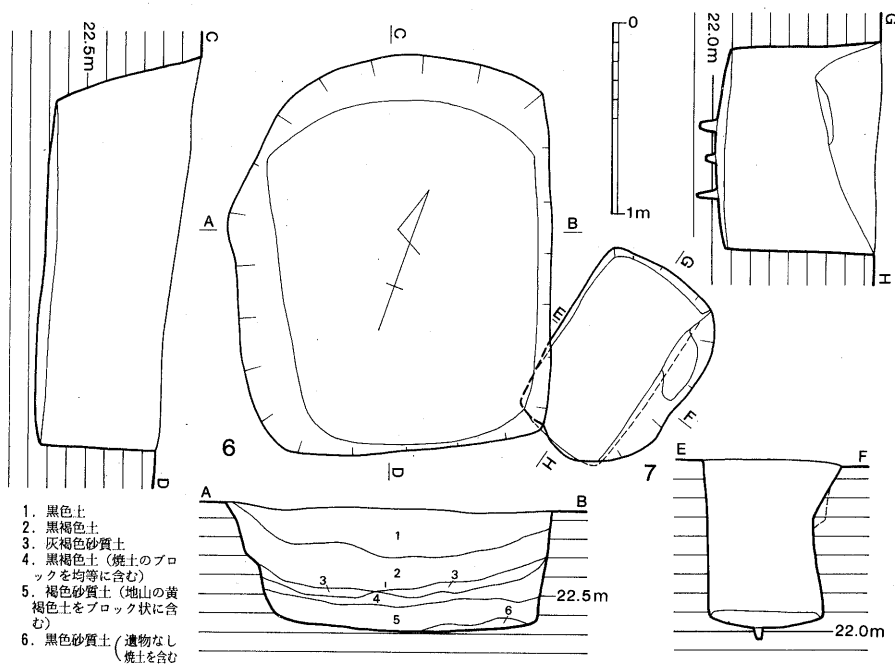
色土がブロック状に混在する。本来は平面プランも長方形を呈していたと考えられるが、西壁は大きく崩れ落ちているようである。やはり無遺物で、他の土壌同様性格は判然としない。ただし、弥生後期初頭の甕が出土した1号土壌と形態や埋土の状況は酷似することから、それとほぼ同年代に属する可能性は高い。なお、7号土壌は本土壌が明確に切っている。

7号土壌 (第18図)

7号土壌は6号土壌に明確に切られる遺構である。東壁は大きく崩れたように広がるが、本来は平面・底面プランとも角の明瞭な長方形であったと考えられる。崩落前のプランは $1.1 \times 0.6 \times 0.8\text{m}$ 程度と推測され、直線的な壁の立ち上がりが特徴的である。底面には長軸線上に15~20cmの間隔で径5cm、深さ8cmの小さいピットが並ぶが、このピットも先の尖った棒状のもので突き刺したものと考えられる。長方形のプランと底面に並ぶ小ピットの存在から、この7号土壌も2号土壌と同様に、所謂縄文時代の陥し穴と呼ばれる遺構であろう。この土壌を切る6号土壌は弥生時代に属すると考えられるだけに、それとの切り合い関係に矛盾はない。

8号土壌 (第19図)

8号土壌は土壌群の中央部東寄りに位置し、 $1.7 \times 1.6 \times 0.6\text{m}$ のほぼ正円形の平面・底面プランを有する。埋土は自然堆積で、黒ボク土を主体とする。ただし、土層断面図中の6層としたものには焼土らしきものをブロック状に若干含む。遺物は全く含まず、他の土壌と同様にその性格は不明である。



第18図 6・7号土壌実測図(1/40)

9号土坑（第19図）

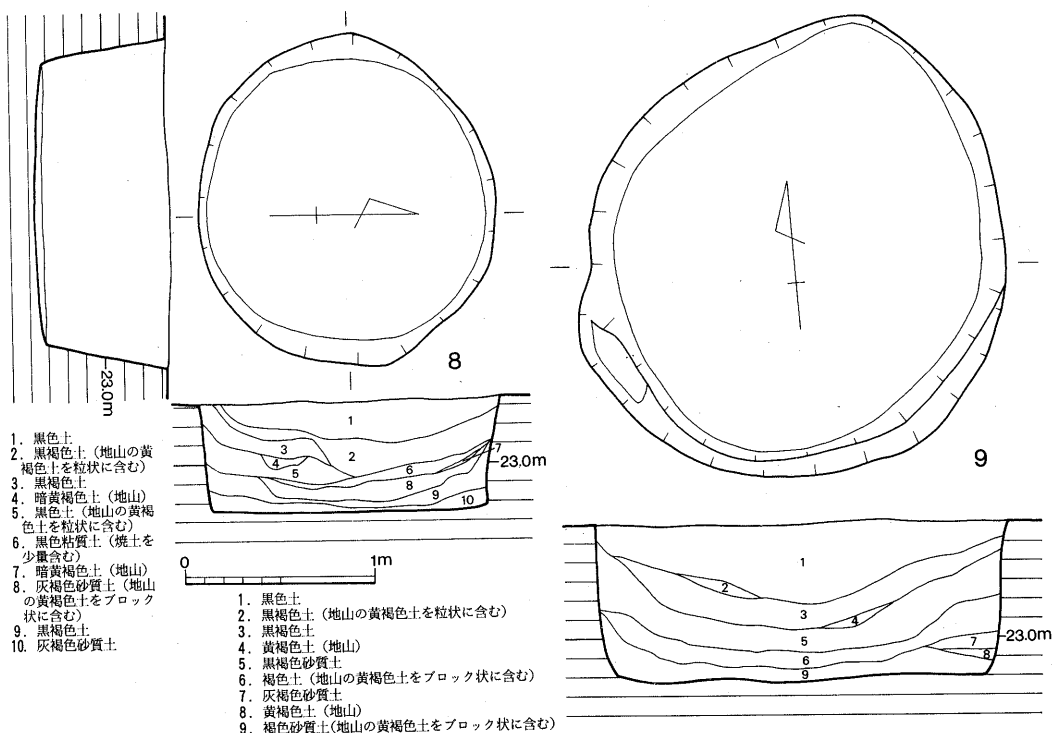
9号土坑は土坑群の中でも北東端に位置し、規模は1号土坑に続いて大きく $2.4 \times 2.3 \times 0.8\text{m}$ を測る。プランは平面・底面とも正円形に近く、壁の立ち上がりも直線的である。埋土は自然堆積で黒ボク土を主体とするが、地山の黄褐色土を全体的に少量含むのが特徴的である。遺物は全く含まれず、遺構としての性格も判然としない。

10号土坑（第20図）

10号土坑は土坑群の中でも北寄りに位置し、 $1.7 \times 1.6 \times 0.5\text{m}$ のほぼ正円形に近いプランを呈する。埋土のうち上半部は黒ボク土だが、下半分は黒ボク土と地山の黄褐色土とが互層状に堆積するのが特徴的である。遺物は全く含まれず、底面に付帯遺構が掘り込まれることもない。

11号土坑（第20図）

11号土坑は土坑群の北端部、10号土坑の北3mに位置する。規模は $1.4 \times 1.4 \times 0.6\text{m}$ を有し、平面は隈丸方形、底面はほぼ円形のプランを呈するが、壁の緩やかな立ち上がりと土層断面図による壁崩落の痕跡より、本来は平面プランも円形を呈していたものと考えられる。埋土は基本的に黒ボク土だが、地山の黄褐色土を全体にブロック状に含む。やはり遺物は全くなく、性格も不明である。



第19図 8・9号土坑実測図（1/40）

12号土壌 (第20図)

12号土壌は土壌群の中でも北東端、10号土壌の南東4 mに位置する。1.6×1.5×0.6mの規模を測り、プランは平面・底面とも円形を呈する。壁は北側が大きく抉れるが、土層断面図の9層(地山の黄褐色土)の存在が示すように崩落したものである。底面の中央部には、浅い落ち込み状のピットが掘り込まれるが、柱を立てたような痕跡は窺えなかった。やはり遺物は全く含まれず、性格も不明である。

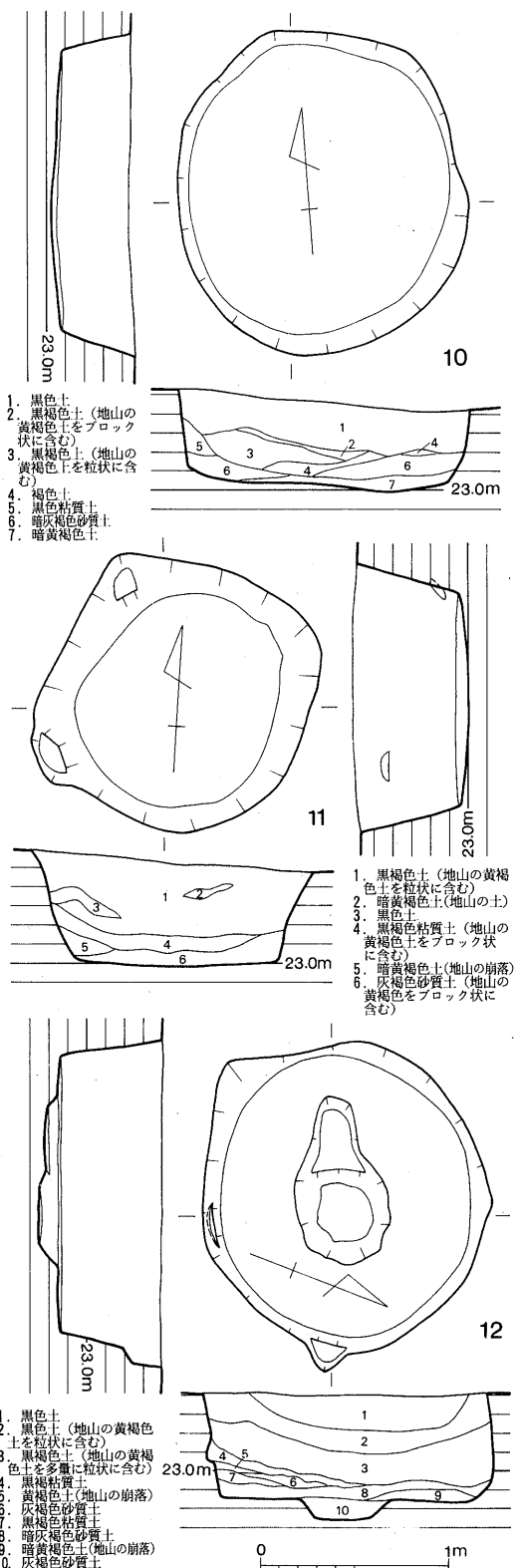
2) 溝 (付図)

溝は夜須町側の北調査区で、南北に併走する2本だけが検出された。東側の1号溝は幅1.2m、深さ25cmを測り、ごく緩やかに開くU字形の断面形態を呈する。中央部には人為的に置かれた、あるいは投棄された10~30cm程度の礫が30個ほど検出されたが、これらに火を受けた痕跡や擦痕は全く見られなかった。2号溝は幅60cm、深さ5cmと非常に浅い。

遺物は1号溝のみから、少量の須恵器(第21図6)や土師器の小片が出土したほか、第21図7のような葉莢も出土し、かなり新しい年代の遺物も含まれる。当初、2本の溝が1.4mの間隔で併走することから道路状態遺構と考えていたが、その後旧地権者より昭和40年頃の基盤整備まではこの2本の溝の場所に道があったことをご教示いただき、道状遺構としての所見を再確認した。

出土遺物 (第21図)

6は須恵器甕の胴部破片で、外面には平

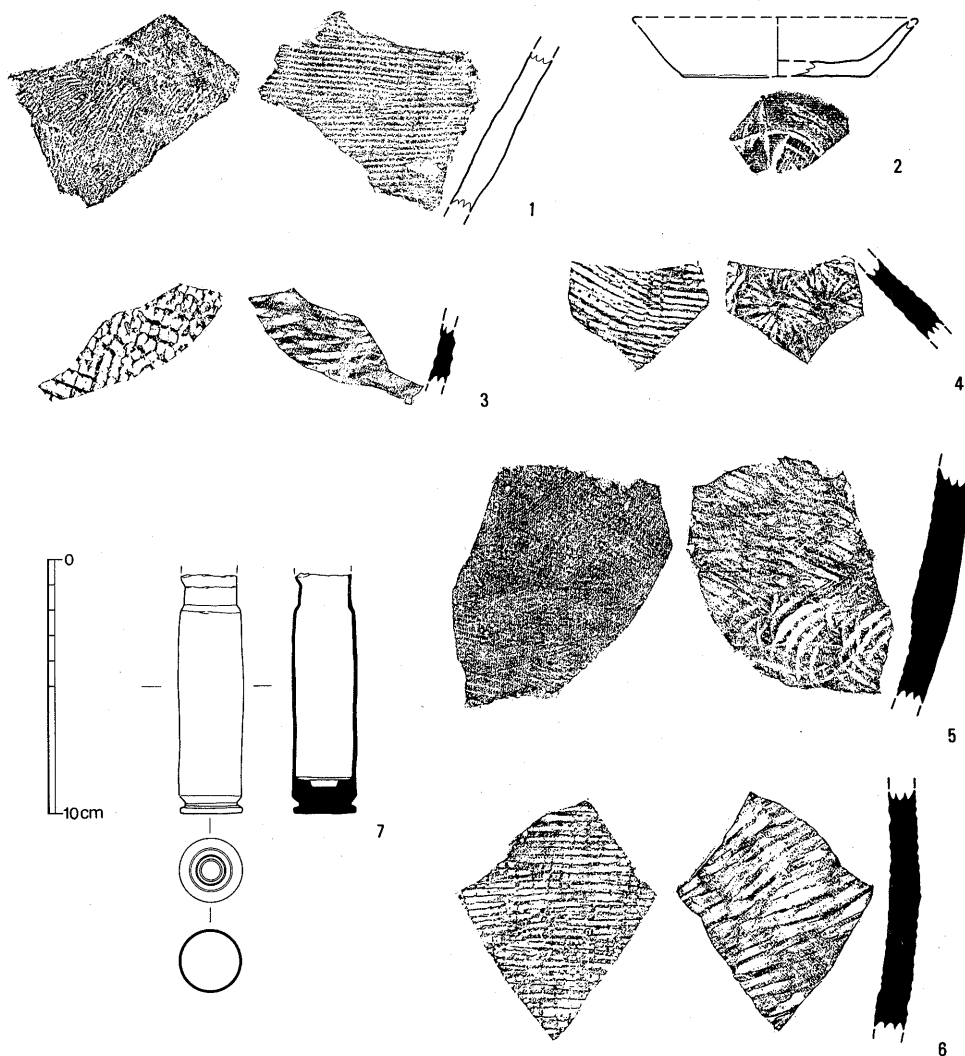


第20図 10~12号土壌実測図 (1/40)

行のタタキ目が、内面には当て具痕が窺える。7の葉莢は長さ9.4cm、最大径2.6cmを測る。青銅色を呈し、先端部が若干歪む。第二次世界大戦時、もしくはそれ以前の昭和初期に使用されていたものである。

3) その他の遺構と遺物(第21図)

宗原遺跡の調査では数多くのピットを検出した。しかし、ビニールやセメント塊が含まれた数基のピットを除いて、すべて雑木類の根の痕跡もしくはシミ状のものと考えられ、遺物も全く出土していない。第21図1～5は表土中に含まれていた須恵器や土師器である。1は内外面にハケ目を有する土師質土器。2は底部にへら切り痕のある土師皿。3～5は須恵器で、いずれも外面にタタキの、内面に当て具痕が観察される。



第21図 宗原遺跡出土遺物実測図(1/3)

Ⅲ 火山灰の分析

1 宗原遺跡土層からの火山ガラスの抽出と始良-Tn 火山灰(AT)の降灰層準

1) はじめに

北部九州は鬼界カルデラ、阿多カルデラ、始良カルデラ、阿蘇カルデラなど巨大噴火による広域テフラの発生源に近い位置にありながら、最近まで、阿蘇4火砕流堆積物を除いて、平野部での有力な広域指標テフラの発見が遅れた。下山ほか(1989)は、北部九州の広域指標テフラが、肉眼観察が困難ながらも平野の低地部分や台地上にごく普遍的に分布していることを明らかにした。竹村(1989)はこのような肉眼観察が困難なテフラの発見のため、土層を5ないし10cm刻みに連続的にサンプリングし、試料から洗い出した火山ガラスの量の変化を検討して降灰層準の目安とした。さらに温度変化型屈折率測定装置を用いて火山ガラスの屈折率を測定し、既知の広域テフラとの対比を行った。この様な方法を採用することで、北部九州各地から火山ガラスが相次いで発見された。一方、溝田ほか(1991)は北部九州各地の台地や緩斜面上に厚く発達した黄褐色細粒土層を同位体化学的手法で研究し、これらの土層が大陸起源の黄砂堆積物(レス)であることを明らかにした。さらにこのレスの層は肉眼観察が困難な鬼界-アカホヤ火山灰(K-Ah)と始良-Tn火山灰(AT)を普遍的に包含している事実が明らかになった。とくにATの降灰層準は旧石器の型式の変化と密接な関係があることが最近明らかになってきたため、ATの降灰層準の決定は考古学的に意義がある。

2) 宗原遺跡の土層

宗原遺跡は曾根田川左岸の低位段丘面上に立地している。表面には淡褐色ないし暗褐色の土壌がある。表層の土層は人為的にかなり攪乱されているため、段丘表面の畑面から約1m掘り下げられた位置に発掘基準面が設けられた。発掘基準面上には淡褐色土の下の黄褐色土も一部露出した。トレンチによる土層の掘り下げ調査の結果、黄褐色土は約2mの厚さがあり、下部は粘土質となる。黄褐色土の下位は50cm厚さの漸移部分を経て、深さ2.5mで段丘構成層の主部とみられる灰褐色砂～粗粒砂層に移行している(第23図)。

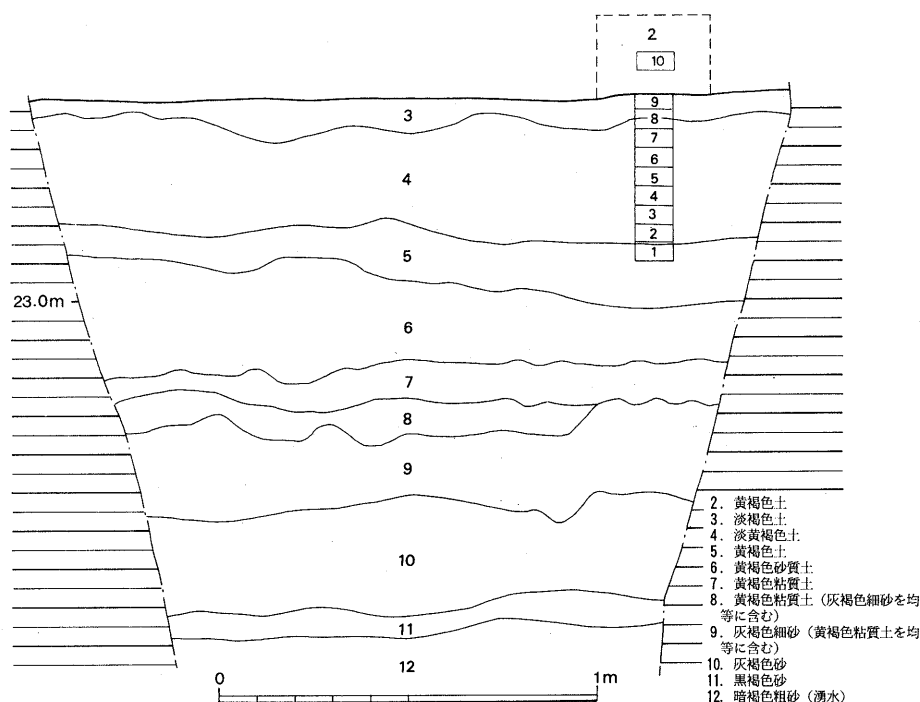
表層の暗褐色土壌はその下の黄褐色土壌と共に夜須町以南の筑紫平野の台



第22図 土層のサンプリング風景(南西から)

地、特に低位段丘面上に普遍的にみられる。暗褐色土壌には多くの火山ガラスが含まれており、これまでに行われた火山灰の分析例では、いずれも火山ガラスの主体は鬼界-アカホヤ火山灰（K-Ah：ca 6,300y. B. P.）に由来するとされている。また、黄褐色土壌層上部には始良-Tn 火山灰（AT：ca 22,000y. B. P.）に由来する火山ガラスが濃集する層準がある。台地上に発達するこの様な黄褐色細粒土壌層の正体は長い間不明であった。溝田ほか（1991）は太宰府市九重原における中位段丘上の黄褐色土の正体が大陸起源の黄砂堆積物（レス）であることをはじめ明らかにした。宗原遺跡の黄褐色土も九重原の細粒土に酷似していたことから、大陸起源の風成塵堆積物（黄砂堆積物：レス）とみられる。黄褐色土は黄砂が低位段丘の台地上に長い間降り積もって形成されたものである。火山灰も同様に降下堆積物であることから降灰時に降り積もり、土壌層に混合したものである。したがって火山灰も黄色土に付随して、普遍的な広がりを持つ。

今回の旧石器は黄褐色土層のうち、発掘基準面下 5 ないし 10cm の範囲の最上部の層準から産出した。このため、火山灰分析によって旧石器出土層準が判明するのではないかと期待された。分析用土壌試料は第23図のように、淡褐色から黄褐色土層までの45cm部分から 5cm 刻みに計 9 層準から連続採取された（試料No.1 から 9）。さらに、発掘基準面より上位の、黒褐色土から 1 個の試料が採取された（試料No.10）。



第23図 土層②における土壌サンプリングポイント（1/20）

3) 分析方法

土壤中火山ガラスの抽出分析の方法は、竹村（1989）に従い、以下の方法・手順に基づいて行い、火山ガラスの垂直分析の特徴が調べられた。

- 1) 採取した試料を乾燥し、7gの試料を直径2cmの試験管に取り分ける。
- 2) 10%の過酸化水素水を70cc加え、1時間放置する。
- 3) 超音波洗浄機で洗浄し、ふるいを用いて120～250メッシュ（極細粒サイズ、125～63 μ ）の粒子を取り出す。
- 4) 120～250メッシュ（極細流サイズ、125～63 μ ）の粒子を乾燥し、封入剤を用いて封入し、岩石薄片を作成する。
- 5) 上記の薄片を偏光顕微鏡を用いて観察し、火山ガラス・結晶鉱物・その他の3つに大別し、各粒子の個数百分率を求め、火山ガラスの特徴を記載する。

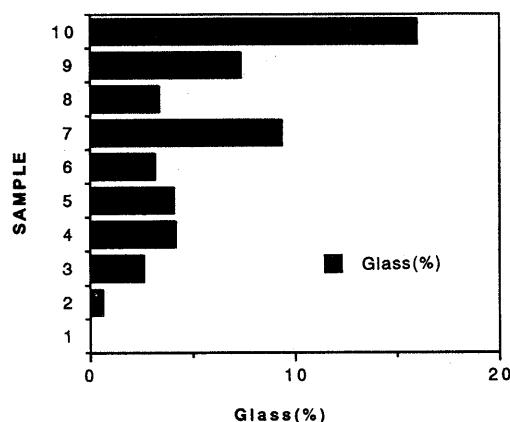
以上の作業で得られた火山ガラスの粒子の個数百分率を土層の上位から下位にかけてヒストグラムで表示し、もしピークがあればそのピーク位置を仮の降灰層準として、火山ガラスの屈折率鑑定に回す。判明した屈折率の基づき、既知の広域テラフと対比し、各ピークにおける他のテラフの混入比率を考慮して最終的な降灰層準を決定する。

4) 土層中火山ガラス含有率分析結果

第24図に示したように、No.1から10まで採取試料のうち、No.1を除き、No.2から10までの9つの層準で火山ガラスが認められた。火山ガラスの含有率の明らかなピークは2つ存在した（第24図）。No.7と10の層準である。火山ガラスの含有率は全体に低く、ピークでも20%以下であ

第3表 サンプル別火山ガラス含有率一覧表

宗原	火山ガラス		造岩鉱物 and プラントオパール	火山ガラス含有率 (%)
	無色	色付		
No.1	0	0	200	0.0
No.2	1	0	185	0.6
No.3	5	0	187	2.6
No.4	7	0	159	4.2
No.5	7	0	163	4.1
No.6	7	0	209	3.2
No.7	43	0	414	9.4
No.8	7	0	200	3.4
No.9	16	0	200	7.4
No.10	38	0	200	16.0



第24図 サンプル別火山ガラス含有率グラフ

る。それにもかかわらず、明瞭なピークがNa7とNa10にみられた。このうちNa10の層準は攪乱された暗褐色土層であること、火山ガラスには色付きガラスが多く含まれていることから、K-Ahの層準に近いと考えられた。

5) 旧石器包含層と降灰層準との関係

旧石器はNa8を含む土層層準から産出しており、Na7でピークを持つ火山灰を特定する必要がある。このため、Na7の試料を京都フィッシュントラック(株)に送り、火山ガラスの屈折率と形態的特徴の鑑定を依頼した。その結果、Na7の黄褐色土試料に含まれていた火山ガラスのうち、98%以上のガラスの屈折率の範囲は1.497~1.501のレンジにあり、無色透明なbwタイプのものである。このような火山ガラスの屈折率のレンジと形態的特徴から、Na7にピークをもつ火山ガラスは始良-Tn火山灰(AT: ca 22,000y. B. P.; 町田・新井、1992)に由来するものに間違いない。したがって、予想したようにNa7の層準がATの降灰層準と考えられる。また、遺跡表層の暗褐色土は鬼界-アカホヤ火山灰(K-Ah)に由来すると思われる火山ガラスを多く含んでいる。それゆえ旧石器包含層はATの降灰直後に形成されたと考えられる。

岩石薄片中に出現する粒子のうち、もっとも頻度の高かったのはプラントオパールではなく、細粒な石英粒子であった。細粒な石英粒子は黄砂の主成分であることから、火山ガラスの含有率が全体に低かったのは、この地点での火山灰の堆積量が元来少なかったことと火山ガラスの垂直拡散が大きかったことが原因とみられる。

(下山 正一)

[引用文献]

- 町田洋・新井房夫(1992) 火山灰アトラス [日本列島とその周辺]。東大出版会、279pp.
- 溝田智俊・下山正一・窪田正和・竹村恵二・磯望・小林茂(1992) 北部九州の緩斜面上に発達する風成起源の細粒土層。第四紀研究、31: p.101-111
- 下山正一・溝田智俊・新井房夫(1989) 福岡で確認された第四紀広域テラフ層について。第四紀研究、28、p.199-205
- 竹村恵二(1989) VI. 土壤中火山ガラス抽出分析。(太宰府市教育委員会編: 太宰府・佐野地区遺跡群 I-一向佐野・原口遺跡一、p.59-70. 太宰府市の文化財第14集。

2 宗原遺跡土壤中火山灰抽出分析の報告

株式会社 京都フィッシュン・トラック

1) 前処理

まず半湿潤状態を生試料を一定量秤量し、50℃で15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、21ビーカー中で数回水替えしながら水洗し、超音波洗滌を行なう。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を液濃度1～2%程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗滌の交換を繰返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、3段階の篩別(60、120、250 mesh)を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120～250 mesh (1/8～1/16mm) 粒径試料を比重分別処理等を加えることなく、封入剤(Nd=1.54)を用いて岩石洋薄片を作成した。

2) 火山ガラス形態分類

前処理で作成した検鏡洋薄片中に含まれる火山ガラス形態を、吉川(1976)に準拠して識別・分類した。なお含有率を測定するため200個の粒子を測定した。その過程で火山ガラスの有無もチェックした。

3) 火山ガラスの屈折率測定

前処理により調製された120～250 mesh (1/8～1/16mm) 粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置(RIMS) * (1)を用い火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては、精度を高めるため原則として1試料あたり30個の火山ガラス片を測定するが、火山ガラス含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

具体的な測定データは巻末にデータシートとしてまとめられ、以下に述べるように表示されている。まず最上位に試料名(Series および Sample Name) が印刷され、Immersion Oil は測定に使用した浸液の種類を示す。火山ガラスの屈折率 nd の式は浸液温度から対応する屈折率を換算するもの、 nd は屈折率、 t は温度を示す。温度変化型屈折率測定法は火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度を測定することにより、各浸液ごとに決められた浸液温度と屈折率の換算式から火山ガラスの屈折率を計算して求める方法である。(As.+De.) /2 は液温制御の際の上昇時(Ascent)と下降時(Descent)の平均値を意味する。繁雑さを避けるためここでは測定温度の表示せず、各火山ガラス片毎の屈折率のみを表示した測定された屈折率値は最終的にTotalの項にまとめられる。count, min, max, range, mean, st. dev, skewness はそれぞれ屈折率の測定個数、最小値、最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして歪度である。屈折率のhistogramの図は縦方向に屈折率を0.001 きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現される。*一つが1個の火山ガラス片の測定結果を示す。

[注] 1) 横山卓雄・檀原 徹・山下 透(1986): 温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定。第四紀研究。25(1)、25—30。

第4表 保存用試料一覧

No.	試料名	処理生試料 乾燥重量 (g)	節別試料重量 (g)			色調判定	備考
			$> \frac{1}{4}$ mm	$\frac{1}{4} \sim \frac{1}{8}$ mm	$\frac{1}{8} \sim \frac{1}{16}$ mm		
1	宗原遺跡 No.7	21.8	1.64	0.45	0.89		

- 注. 1) 表中の数字は保存試料の重量を示す。
 2) $\frac{1}{8} \sim \frac{1}{16}$ 段階の保存試料は、一部岩石薄片作成に使用したため実際よりわずかに少なくなっている。
 3) 色調判定は、新版標準土色帳（農林水産技術会議事務局監修，1970）による。

第5表 火山ガラス形態分類一覧表

No.	試料名	火山ガラス形態 ※(1)							合計	色付 gl	備考
		Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It			
1	宗原遺跡 No.7	14	145	3	35	1	—	2	200	+	火山ガラスでは大部分 バブル・ウォール型で占 められ濃い色付ガラス や不規則型も少量含む。
		7.0	72.5	1.5	17.5	0.5	0.0	1.0	100.0		

- ※(1) 上段は計測粒子数、下段は%を示します。
 なお、火山ガラス型とその略称は以下のように対応します。
 Ha, Hb: 扁平型（バブル・ウォール型） Ca, Cb: 中間型
 Ta, Tb: 多孔質型（軽石型，繊維状型） It: 不規則型

第6表 火山ガラス屈折率測定結果一覧表

No.	試料名 (sample name)	屈折率範囲(range)		屈折率 平均値 (mean)	測定 個体数 (個)	屈折率最頻付 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
		最小	最大				
1	宗原遺跡 No.7	1.497	1.501	1.4987	30	$1.498 \leq n_d < 1.500$ *75%	H, C 型

- *全火山ガラスに対する、mode 範囲中にある火山ガラスの含有%を示す。 ※ H: 扁平型
 C: 中間型
 T: 多孔質型

第7表 火山ガラス屈折率データシート

*** Original Data Sheet ***

93/08/19
11:37:31

Series Name : Kyushu Univ.
Sample Name : 1.ムネハライセキ No.7
Analist : Yamashita
Material : VG
Immersion Oil: No.3.8 (Nd=1.51907-0.000393·t)

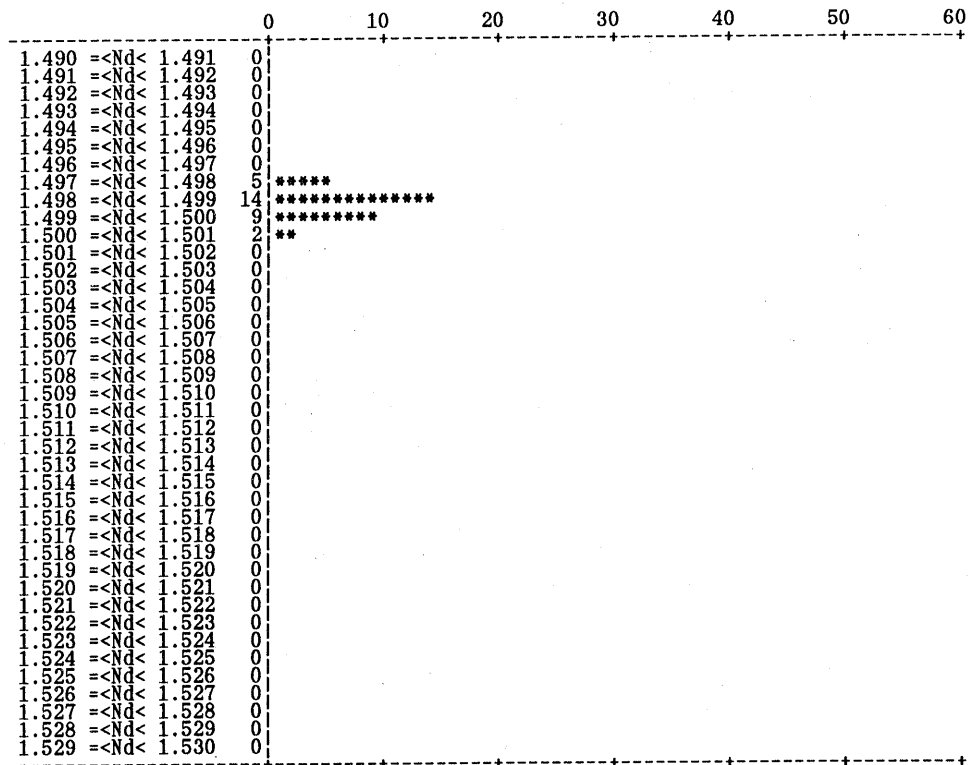
(Ascent+Descent)/2

1.4983	1.4985	1.4987	1.4989	1.4990	1.4994	1.4997	1.5000	1.4974	1.4976
1.4980	1.4985	1.4989	1.4998	1.5001	1.4978	1.4980	1.4983	1.4985	1.4992
1.4976	1.4986	1.4990	1.4996	1.4984	1.4986	1.4996	1.4979	1.4982	1.4998

Total	count	min.	max.	range	mean	st.dev.	skew.
:	30	1.4974	1.5001	0.0027	1.4987	0.0008	0.1417

*** Histogram ***

* = 1



右ページ写真図版の凡例

重 鉱 物

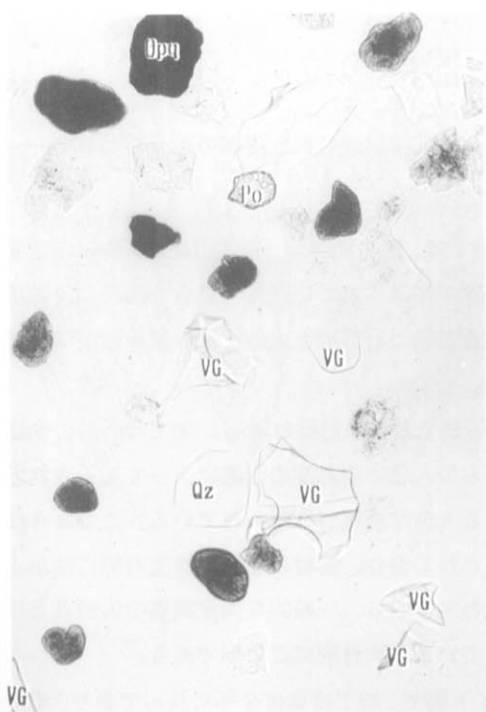
Ol: カンラン石 Id: イデイングサイト Opx: 斜方輝石 Zr: ジルコン Cpx: 単斜輝石
Bi: 黒雲母 GHo: 緑色普通角閃石 Ap: アパタイト BHo: 褐色普通角閃石 Gar: ザクロ石
Opq: 不透明鉱物

そ の 他

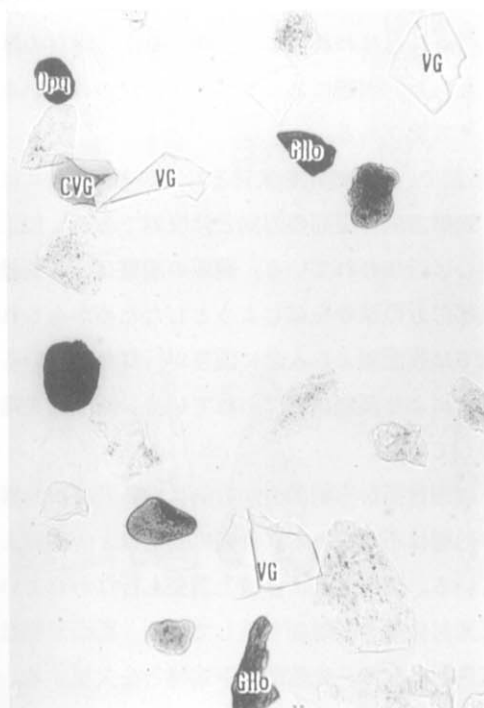
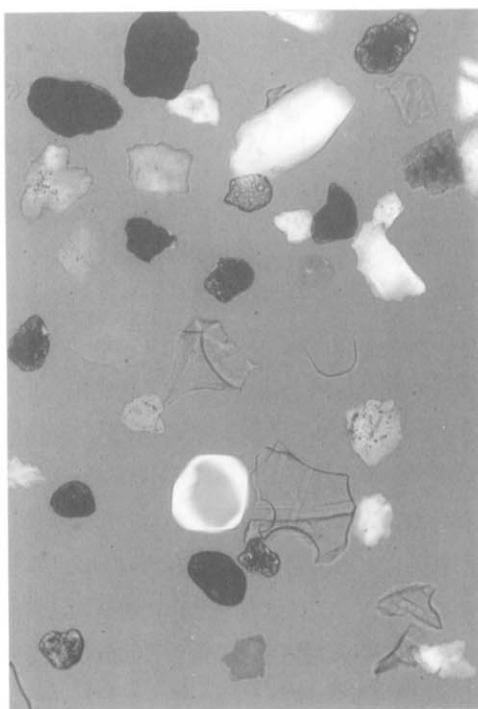
VG: 火山ガラス CVG: 色付火山ガラス Po: プラント・オパール

*但し、写真倍率は焼付ごとに毎回多少の違いが生じるが、およそ90~93倍程度である。

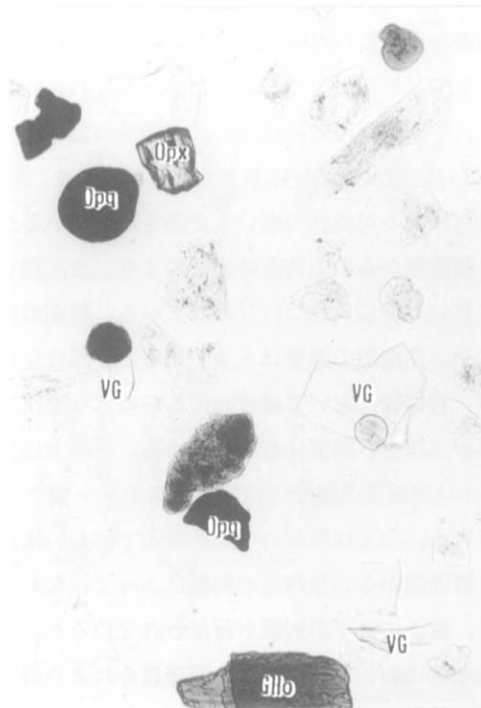
open nicol



cross nicol+鋭敏検板



open nicol



open nicol

宗原遺跡 No.7 試料顕微鏡写真

IV 宗原遺跡出土石器群の位置づけ

——宗原遺跡および向福島遺跡採集石器の紹介をかねて——

1. 宗原遺跡および向福島遺跡採集石器の紹介

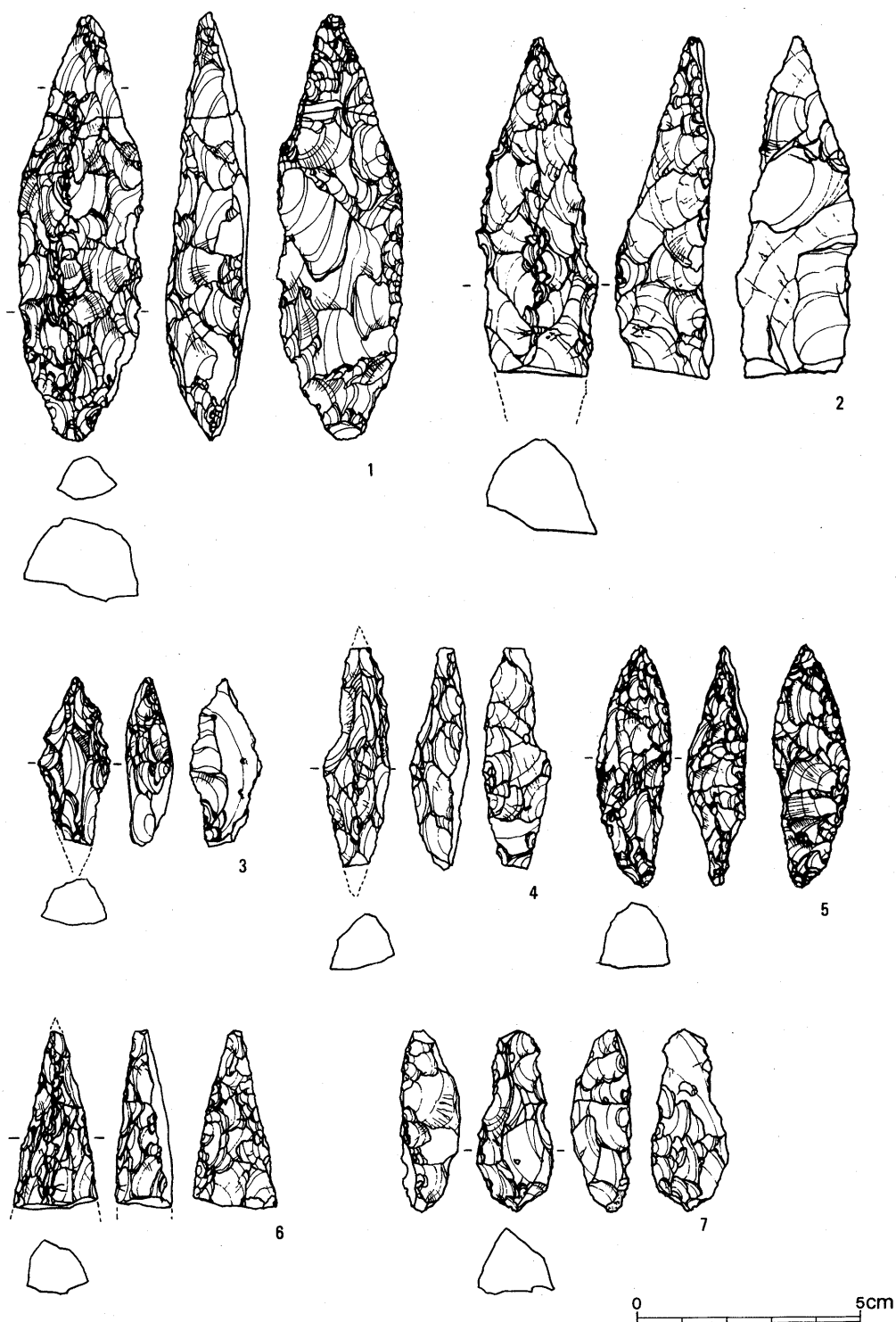
宗原遺跡やその北約350mに位置する向福島遺跡では、鬼木和憲氏（夜須町在住）や平田定幸氏（現、春日市教育委員会）によって以前より石器が採集されていた。それらの器種は角錐状石器に限られることから、今回宗原遺跡の発掘調査で得た石器群と大きく関係する重要な資料と考えられる。以下では、その紹介を行ないたい。

1は向福島遺跡で採集された資料である。黒曜石製で素材の形態は不明。加工は石器の全面に及んでいる。特に、下端部付近には、腹面側からの入念で急角度の剝離によって加工されている。また、先端部は背面側からの対向剝離による入念な調整が行なわれている。このような対向剝離による調整は、腹面右側縁に入念に行なわれており、素材の形状が腹面右側に厚かったためであろう。ほぼ背面全体に稜上調整が行なわれており、一般的な両面調整の尖頭器とは異なる。先端部の断面は三角形、胴部は稜を残しているが半月形に近い形である。

2は宗原遺跡で採集された資料である。サヌカイト製で、加工はほぼ全面に及んでおり、素材の形態は不明。両側縁からの急角度の剝離によって加工されている。先端部付近には、細かい調整が入念に行なわれている。稜上調整は先端部付近に行なわれており、稜の修正、素材の厚みを減じる等の目的があったのかもしれない。腹面は対向剝離によって加工が行なわれているが、一部素材段階に残された可能性のある大きなネガ面がある。

3は向福島遺跡で採集された資料である。黒曜石製で、横長剥片を素材としている。背面には素材段階の可能性の高いネガ面を残しているが、剝離方向は腹面の方向とは反対である。加工は腹面側からの急角度の剝離により、背面側を中心に行なわれている。胴部の調整は、右側縁において特に入念に行なわれている。腹面の打点部付近の厚みを減じようとしたためかもしれない。先端部の調整は入念である。基部は左側縁では腹面側より入念に調整が行なわれているが、右側縁においては背面側からのノッチ状の剝離により調整が行なわれている。断面は先端部が三角形、胴部は台形を呈する。下端部は欠損している。

4は向福島遺跡での採集。サヌカイト製で、先端部背面から胴部腹面方向に走る石理が観察される。加工は素材の全面に及んでおり、素材の形態は不明である。背面の加工は、両側縁より腹面側からの急角度の剝離によって行なわれている。胴部付近には稜上調整も行なわれている。腹面には平坦剝離が行なわれているが、一部素材段階の剝離面を残している。断面形態は先端部においては三角形、胴部はそれより鋭い三角形になる。先端部と下端部とを欠損する。



第25図 宗原・向福島遺跡採集石器実測図（2/3 小畑弘巳氏実測）

5 も向福島遺跡採集。黒曜石製で、加工は素材のほぼ全面に及んでいる。腹面にわずかに残る剥離面より、横長剥片を素材にしていることがわかる。素材の形態のためか、背面の調整は右側縁において入念に行なわれている。基部は両側縁とも調整は細かく、腹面は平坦剥離により加工が行なわれ、特に先端部の調整は入念である。背面には明瞭な稜は観察されないが、胴部付近ではわずかに存在する稜に稜上調整が行なわれている。断面は半月形に近い。

6 も向福島遺跡での採集。サヌカイト製で、加工は素材の全面に及んでおり、素材の形状は不明である。背面右側縁において、特に急角度の剥離が行なわれている。背面の先端部から胴部にかけては、稜上調整が行なわれている。腹面は対向剥離が行なわれているが、両側縁付近は特に入念に調整が行なわれている。断面は三角形。先端部並びに胴部以下を大きく欠損している。

7 も向福島遺跡での採集資料である。サヌカイト製で、横長剥片を素材としている。背面の加工は、腹面からの急角度の剥離によって行なわれている。背面両側縁からの剥離による稜を形成するが、稜上調整は行なわれていない。腹面においては、下端部や左側縁付近に基部加工とは別の調整が集中している。断面の形状はほぼ三角形を呈している、先端部が尖らないことから、尖頭器とは別の目的のために製作された石器である可能性が高い。

2. 宗原遺跡出土石器群の位置づけ

1) はじめに

宗原遺跡から出土した石器群は、これまで九州において検出されてきた石器群とはその様相が大きく異なる。つまり、示準的な石器が角錐状石器に限定されるのである。これらにはいくつかの形態的ヴァリエーションが存在するが、包含層にではなく、層と層の境目から焼礫群を伴って面的に出土するという状況を考慮すれば、年代差の所産として処理してしまうことは難しい。以下では、このような状況が意味することについて若干考えてみたい。

第8表 宗原・向福島遺跡採集石器観察表

No.	遺跡名	器 種	石 質	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	所有者	備 考
1	向福島	角錐状石器	腰岳産黒曜石	9.42	2.74	1.76	40.2	平田定幸氏	
2	宗 原	角錐状石器	サヌカイト	(7.50)	2.58	1.88	34.2	平田定幸氏	下端部欠
3	向福島	角錐状石器	腰岳産黒曜石	(3.72)	1.58	0.94	4.7	平田定幸氏	下端部欠
4	向福島	角錐状石器	サヌカイト	4.88	1.48	1.22	7.5	鬼木和憲氏	先端部・下端部欠
5	向福島	角錐状石器	腰岳産黒曜石	5.30	1.67	1.33	9.5	鬼木和憲氏	
6	向福島	角錐状石器	サヌカイト	(3.9)	(1.89)	1.33	7.8	鬼木和憲氏	胴部以下欠
7	向福島	角錐状石器	サヌカイト	4.01	1.70	1.28	7.9	鬼木和憲氏	

2) 角錐状石器と三稜尖頭器

九州以外の地域で「角錐状石器」と呼称する石器を、九州では「三稜尖頭器」と呼ぶ。これは断面の形態が三角形を呈することによる。この用語が学界に登場するのは1970年である。福岡県筑紫野市針摺所在の野黒坂遺跡の報告において、「尖頭器 三稜型値と紡錘形^(マ)の二種からなっている」と記述されており、さらに前者を「三稜ポイント」とも呼称している。つまり、尖頭器という広義の器種に対する型式名として、三稜型尖頭器や三稜ポイントという名称が用いられているのであるが、正式に定義つけられたものではない(松岡他編1970)。その後、研究者間で徐々に普及していく中で、橘昌信氏が宮崎県佐土原町船野遺跡出土資料を分析する際に、これを正式に分類して定義づけた(橘1975)。すなわち「……この a2 類は原則として三つの稜を形成していることから“三稜尖頭器”と呼んでおき、a1 類とは区別しておく。」とされ、ここにおいて器種としてはじめて認定され現在に至っている。しかし、その後の資料の蓄積に伴い、従来の認識にない形態的なヴァリエーションが認められるようになった。例えば、外形的には類似していても、断面形態が四角形や五角形を呈するもの等である。また最近では、器種用語の普及と学史的評価により、類似する急角度の加工技術を有するものすべてを含めて三稜尖頭器と呼ぶ研究者と、あくまで断面三角形のものだけを三稜尖頭器と呼ぶ研究者とに分れる傾向にある。さらに、別の研究史的立場から角錐状石器という名称を使う研究者も現われ、用語の混乱がみられるようになった。筆者はこの種の石器に対し、汎列島的に類似資料の存在が確認されているという事実と、この種の石器の機能が多岐に及ぶであろうという可能性から、最上位の器種レベル概念として「角錐状石器」と呼称する次第である。

3) 宗原遺跡出土石器のヴァリエーション

先述したように、宗原遺跡で出土する示準的な石器は、いくつかの形態的ヴァリエーションによって構成される角錐状石器だけである。このうちプライマリーな状態で出土した6点を分類すれば、以下の4類型になる。

I 類(第9図3・25) 分厚い剥片を素材とし、素材の周囲に対して主要剥離面から背面に向け、急角度の剥離を施す。そして、背面に形成された稜に稜上調整が行なわれる。主要剥離面については両側縁より調整剥離が行なわれ、全面加工されている。断面形態はほぼ三角形となる。

II 類(第9図1・2) 縦長剥片を素材としている。素材の周囲だけを加工し、背腹両面に素材面を残す。背面には素材段階からの稜と、両側縁からの剥離によって形成された稜とによって一稜を形成する。基部加工は特に入念で、全体に器厚は薄い。

III 類(第10図4) 厚い横長剥片を素材とし、主要剥離面側より急角度の剥離が行なわれ背面に一稜を形成する。一部に稜上調整も行なわれ、側縁は鋸歯状に近い。ズングリムックリの形態。

IV類（第9図20） 厚い剥片を素材とし、周囲より加工が行なわれるが、剥離は急角度ではなく平坦剥離に近い。背面に一応形成される稜も明瞭でない。

このような4類型から構成される角錐状石器の意義を、どのように解釈すれば良いのであろうか。地域差の認識は問題外として、石器群の出土状況から大きな時間差はなく、仮にそれが存在しても、考古学的なタイムスケールでは同一時期と考えて差し支えないものであろう。そうすると、我々が石器研究の分析方法として従来用いる剥片剥離技術と二次的加工技術という一体的な石器製作技術の概念では捉え難い状況が、宗原遺跡では存在したことになるのであろうか。つまり、旧石器人の石器製作に対する認識・理念と、我々が現在の視点で図式化するそれとは大きく異なっているものなのであろうか。

道具としての石器製作の大前提は、まず第一に機能的要求を満たすことにあろう。その前提を踏まえた上で、装着や使い易さ等が意識され、技術を駆使することでより良きものへの指向として“改良”が行なわれるのである。この指向をイメージするのは道具の製作者（機能的要求者）であり、現代の我々には決して見ることのできないものである。機能的要求の範囲においてそして持ちうる技術を駆使して、旧石器人が製作した道具がナイフ形石器や台形石器や剥片尖頭器等であり、また角錐状石器でもある。

剥片尖頭器と角錐状石器とはその形態的な差とは異なり、道具に対する指向性には極めて近いものが想定される。剥片尖頭器は剥片をそのまま素材として用い、基部を加工する。左右側縁を加工する場合、我々は側縁における加工を型式差として認識するが、これには地域性も含むものとして把握されることもある。しかし、すべてがそうであるとはいえず、剥片尖頭器の側縁加工は軸修正の可能性が高いと考えられる。つまり、製作者の最大の目的は機能に見あった形態になるように剥片素材の基部を加工し、側縁に修正のための加工を行なったとも理解できるのである。

角錐状石器製作における最大の特徴は、極論すれば素材の形態を限定しないことにあろう。急角度の剥離技術を駆使し、素材面を残さぬほどに究極的に加工が行なわれ、製作過程を具体的に復原することが困難な場合も少なくない。したがって、石刃技法というような我々の目で見えた規格性は認めがたい。しかし、旧石器人にとってはどうであろうか。素材の形態はまず機能と法量に基準を置き、技術駆使のピークを最終形態を決定する急角度の剥離による加工に集中させたと考えられる。

この意味において、宗原遺跡における角錐状石器のヴァリエーションの存在は重要である。先述したように、形態的には異なっても技術的方向性が共通するという事実は、そこに細かい型式差や時期差が存在するのではなく、旧石器人のある要求（共通目的での製作）の結果といえるのではないのであろうか。もっとも、こういった形態的バリエーションが生じた背景には、石材獲得の条件、狩猟形態の在り方、他集団との関係、自然環境等といった様々な要素が

複雑に絡み合い“宗原 Complex”ともいうべき状態がおそらく存在していたのであろう。そういった意味で角錐状石器とは、AT 降灰後まさにこのような複雑な条件下で各地に展開していった石器ではなかったのであろうか。

4) 石材について

宗原遺跡から出土・採集された石器は、剥片・碎片を含めて59点で、総重量は403.7 gになる。1 遺跡から出土する石器の点数・重量としては少ない方ではあるが、ここで得られた資料をもとにいくつかの可能性について敢えて積極的に考えてみたい。

宗原遺跡出土石器群の主要な石材は、腰岳産黒曜石、針尾島産黒曜石、サヌカイトの3種類で、それぞれ43.4 g、63.6 g、198.0 gという搬入量からなる。このうち剥片・碎片を除いた石器の搬入量は、腰岳産黒曜石22.5 g、針尾島産黒曜石46.9 g、サヌカイト163.2 gである。宗原遺跡から最も近い石材の原産地が、サヌカイトを産出する佐賀県三日月町の老松山（宗原遺跡から西へ約40km）であることから判断しても、この数値は妥当なものと考えられる。剥片・碎片についても同様で、腰岳産黒曜石20.9 g、針尾島産黒曜石16.7 g、サヌカイト34.8 gという数値が得られる。しかし、点数に対する割合を比較した場合、1 点当り腰岳産黒曜石0.9 g、針尾島産黒曜石1.4 g、サヌカイト5.0 gとなる。これは腰岳産および針尾島産黒曜石の剥片・碎片の大半が角錐状石器の調整剥片であるが、サヌカイトの剥片・碎片についてはその可能性が低いという、肉眼観察の結果と符合する。つまり、宗原遺跡のサヌカイト製角錐状石器については、遺跡内で積極的な石器製作が行なわれなかったという仮設も成り立つのである。

しかし、このような状況はむしろ、遺跡の特異性として理解するのが適当かもしれない。宗原遺跡における重要な石器は角錐状石器であり、その多くはサヌカイト製である。先述した仮設—宗原遺跡のサヌカイト製角錐状石器はこの遺跡内で積極的に製作されなかった—によりこれらは他の場所で製作されたはずであるが、その検証は難しい。そこで周辺地域に視野を広げて見ると、完成品や未製品の角錐状石器が多量に検出された老松山遺跡が注目される。老松山遺跡における未製品の存在は重要で、石器製作が完結する以前に他の遺跡へ持ち出される可能性が想定されるのである。それが1点1点の石器について、製作・使用される各段階が存在するということである。その検証は難しいが、宗原遺跡の状況は以上のような仮設の中にあるのかもしれない。細かい機能差は別として、法量的かつ製作的にヴァリエーションが存在するのもそのためとも考えられる。例えば、3や25のように他地域との類似性が認められる資料は、ある程度完成された姿で用いられた可能性に対し、1や2のように素材に規格性が乏しいものは、携帯石材から得られた素材によって目的の形態に近づけた結果と考えられるのである。

今後、多久や老松山のサヌカイト原産地と背振山とを背景として、周辺地域においてサヌカイト石材を用いる遺跡の厳密な検討は、重要な意味を持つであろう。

5) 宗原遺跡出土石器群の編年的位置について

九州地域における旧石器の編年的作業は、AT という一定の年代的基準を有する火山灰を介在させ、そして各遺跡出土石器群の組成を比較・検討する方法で行なわれる。従来、角錐状石器は点数や種類の差こそあれ、ナイフ形石器や台形石器や剥片尖頭器等といった他の器種と共に検出されてきた。しかし、宗原遺跡においてはこれまでの事例とは異なり、示準的な石器は角錐状石器に限られるという得意な事例が得られた。調査成果から確実に言えることは、石器群が AT 降灰後に位置づけられるということである。以上のような条件から、量的に限定された宗原遺跡出土の石器群に編年的な位置づけを与えることは決して容易なことではないが、今後の展望を模索するという予察的な意味をも含めて敢えて試みてみたい。

九州地域において角錐状石器が盛行するのは AT 降灰後のことで、剥片尖頭器と共に出現して、ナイフ形石器や台形石器と石器組成を構成する。その構成比や種類は様々であるが、宗原遺跡では石器の総数や製品の総数から見ても、角錐状石器の占有率は圧倒的で、また形態のヴァリエーションも多い。これらの角錐状石器から編年上有意となるであろう型式を抽出するなら、大きく 2 種類に分かれる。1 つは腰岳産黒曜石を石材に用いるもので、Ⅲ類に相当する。このタイプは筑紫野市から小郡市一帯にかけて検出されている。全体的に小型で、ズングリムックリしている。もう 1 つは「宗原型」ともいうべきⅠ類で、三面加工と稜上調整の施されている大型のものである。Ⅲ類に相当する腹面側からの主にノッチ状に行なわれる剥離や、腹面に素材面を残しているこのタイプは、西北九州の遺跡に類例が多い。一方、Ⅰ類に相当する急角度の剥離による三面加工と稜上調整が施されている大型のこのタイプは、周辺地域では佐賀県多久市長尾開拓遺跡や佐賀県小郡郡三日月町老松山遺跡、東九州では大分県大野郡三重町百枝遺跡 C 地区等にその類例が求められよう。これらはすべて AT 降灰後に位置づけられている。そして、この状況は大分県岩戸遺跡第Ⅰ文化層、6 層下部文化層や、長崎県百花第遺跡Ⅵ層石器群と時期的に大きく異なることはないと考えられる。では、九州地域以外の西日本地域との関連はどうであろうか。

宗原遺跡のような角錐状石器を主体とする石器群を出土する遺跡としては、兵庫県板井寺ヶ谷遺跡、大阪府高槻市群家川西遺跡 H 地点、国府遺跡第 6 地点、八尾南遺跡第 6 地点等があげられる。これらの石器群に対する編年的位置づけは、近畿を中心として展開されてきた瀬戸内技法の研究と共に行なわれてきた。その結果、八尾南第 3 地点の角錐状石器と小型ナイフ形石器の技術基盤である櫃石島技法の共存、瀬戸内技法の衰退化、大山系火山灰との関係等から、国府石器群を主体とする石器文化に後出するものとして位置づけられている。これに対し、前段階の国府期に角錐状石器を主体とする石器群が共存する事例は、大阪府高槻市群家今城遺跡 C 地点のみに限られる。したがって、角錐状石器には外来的要素が幾分存在し、九州より波及してきたものとしての可能性が考えられている（松藤 1985）。

では次に、これらの国府文化に後出する、各遺跡の石器群との組成における共通性について

考えてみたい。そこで、宗原遺跡出土49、使用痕ある不定形石器に注目したい。針尾島産黒曜石製の不定形素材に、角錐状石器に共通するような厚い剥片への急角度の調整が部分的に行なわれ、その一部を刃部として使用している。類例として、大阪府国府遺跡第6地点があげられるが、この種の石器に対する評価が問題となろう。はたして、角錐状石器を主体とする石器群にとって不変的な構成要素となるのかどうか注目していきたい。

以上、いくつかの事例の検討を考慮して宗原遺跡出土石器群の編年的位置づけを推察するとすれば、岩戸遺跡第Ⅰ文化層、同遺跡6層下部文化層、大分県百枝遺跡C地点第Ⅱ文化層、百花台遺跡Ⅵ層等との関連性が指摘されよう。

6) おわりに

宗原遺跡を含む筑後平野北部地域は、福岡県下において旧石器時代遺跡が最も集中する地域として従来より注目されてきた。しかし、周知の資料はその大半が採集品であり、年代的位置づけや遺跡の性格については未だ不明な点も少なくない。今回、宗原遺跡の調査によって初めて年代的に保証された石器群が検出されたことは、当地域における旧石器時代研究の指針となるであろう。そして、この成果が延いては九州地域（特に北部九州）の調査・研究の進展に寄与するであろうことを期待し結びとしたい。

(杉原 敏之)

[参考文献]

- 九州旧石器文化研究会編 1992『九州旧石器時代関係資料集成Ⅱ－角錐状石器－』
清水宗昭・栗田勝弘編 1985『百枝遺跡C地区』三重町教育委員会
白石浩之 1984「旧石器時代における角錐状石器の様相－特に九州地方を中心として－」『大平臺史窓』3
白石浩之 1989『旧石器時代の石槍』Up 考古学選書、東京大学出版会
芹沢長介編 1978『岩戸』東北大学文学部考古学研究室
副島和明・伴耕一郎編 1986『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』長崎県教育委員会
田川肇・副島和明・伴耕一郎編 1988『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県教育委員会
橘昌信 1975「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢』3 別府大学考古学研究室
富永直樹 1983「佐賀県老松山遺跡の旧石器」『旧石器考古学』27 旧石器文化談話会
西村隆司編 1988「長尾開拓遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』第8集 佐賀県教育委員会
萩原博文 1993「九州における角錐状石器の編年について」第18回九州旧石器文化研究会発表資料
古森政次 1993「三稜尖頭器の分類」第18回九州旧石器文化研究発表資料
松尾吉高編 1989「老松山遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』第10集 佐賀県教育委員会
松岡史・前川威洋他編 1970「野黒坂遺跡」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集 福岡県教育委員会
松藤和人 1981「西日本における船底形石器の編年の予察－近畿、瀬戸内地方の出土例を中心に－」『旧石器考古学』22 旧石器文化談話会
松藤和人 1985「九州における国府系旧石器の系譜」『肥後考古』5 肥後考古学会
八尋実 1984『船塚遺跡』神埼町教育委員会
山下実・富永直樹 1984「佐賀県東分の旧石器」『旧石器考古学』27 旧石器文化談話会

V ま と め

宗原遺跡一帯は曾根田川の低位段丘上に相当し、一見平坦な地形に見える。しかし、それは第2次世界大戦前のイモ畑化や昭和40年代の基盤整備によるもので、本来は起伏に富んだ地形であったと聞く。実際に調査してみると、遺構の遺存状態は極めて悪く、著しい削平の跡が窺える。それでも、旧石器・縄文・弥生時代や現代の遺構や遺物が若干検出された。

土壌は12基検出されたが、このうち2基は縄文時代の陥し穴状遺構と考えられる。長方形に近い平面プランで、底面中央付近には棒状のものを突き刺した痕跡が、小さなピットとなって3～5つ検出された。他の10基については、1号土壌の1個体分の弥生後期初頭期の土器を除いて遺物の出土は全くなく、年代の決め手に欠ける。1.0～2.6mの円形もしくは隅丸方形の平面プランを呈し、埋土はいずれも自然堆積によるもので、底面や壁に付帯施設が存在したような痕跡もない。調査区南端に密集するが、特に規則的に配置された様子もなく、貯蔵穴や墓としての機能を想定する積極的な根拠も乏しい。切り合わないことや埋土の類似等から1号土壌とそれほど大きな年代差は存在しないであろう。

宗原遺跡で最も注目されるのは旧石器時代である。石器は第3層と第4層の境(第4層上面)から焼礫群と共に出土し、また第4層の最上部、つまり出土石器群の直下にATの降灰層準が相当するという事実が確認された。出土した石器は採集されたものを含めても59点と少ないが、そのうち製品は11点と高い占有率を示し、9点の角錐状石器や尖頭器、1点の削器、1点の敲石からなる。一般的にはナイフ形石器や台形石器や剥片尖頭器と共に石器群を構成するが、宗原遺跡やその北約350mに位置する向福島遺跡では、今回の調査以前から不思議と角錐状石器ばかりが採集されており、この地域の特異性が注意を引く。宗原遺跡については、角錐状石器に形態的ヴァリエーションが存在しつつも、出土状況からそれが年代差による所産とは考え難く、その解釈が大いに問題になる。また、遺跡の性格についても、狩猟に関連したキャンプサイト(キルサイト)として簡単に処理されるものではなく、様々な自然環境や社会背景が関与した結果と考えられよう。

今回、宗原遺跡で得られた成果は未だ他の遺跡においてほとんど類例がないだけに、その位置づけは難しく、また慎重でなければならない。しかし、今後の旧石器時代研究にとっては重要な要素を多分に含んでいると考えられるだけに、その困難で慎重な位置づけが積極的・建設的に行なわれることを大いに期待したい。

A SUMMARY OF SOHBARU SITE

This report summarizes the results of an archaeological excavation at the Sohbaru site in Chikushino City, Fukuoka Prefecture, Japan (see the map on the back of the front cover), dating to the Late Paleolithic Period (30,000~12,000 bp). This excavation was carried out between May 26, and July 31, 1993 by the Fukuoka Prefectural Board of Education prior to the construction of a road.

The Sohbaru site is situated on the edge of a riverbank terrace, 23 meters above the sea level. Many artifacts were discovered on a single plane sandwiched between the third and fourth strata, overlying the AT (Aira-Tanzawa) volcanic ash resulted from an eruption of 22,000 to 21,000 years ago. The artifacts include a hammer-stone, a scraper, seven points, and a gathering of fire cracked rocks. It is very worthy of note that the lithic assemblage at the Sohbaru site lacked backed-blades and flake-trapeze-shaped tools, which would normally be a part of the typical Late Paleolithic assemblages in western Japan. All the lithic artifacts collected on the surface of the site and its vicinity before the excavation were points. Another important aspect of the assemblage is that the seven points were classified into four types, but the four types were all used contemporaneously, rather than a type chronologically earlier than another.

Accordingly, two important interpretations can be drawn: 1) the Sohbaru site was a temporary extraction camp which carried a single function, such as hunting; and 2) variations among the four types of points do not represent a chronological difference but probably differences in raw material rocks and/or functions.

These two points, the function of a single site within a settlement system and typological difference of lithics as a result of contemporaneous activities, have not been well discussed in the Paleolithic archaeology in Japan. The results of the excavation at the Sohbaru site, therefore, will significantly contribute to future studies on the Late Paleolithic Period.

宗原遺跡의概要

本書는 福岡縣筑紫野市에 所在이며 後期舊石器時代 (約30,000-12,000年前)에 歸屬한 宗原遺跡의 發掘 報告書이다. (表紙裏의 位置圖參照) 調査는 縣道久留米-筑紫野線 建設工事의 事前調査로 福岡縣 教育委員會 에 의해서 1993年 6,7월에 實施하였다.

宗原遺跡은 標高23m의 河岸段丘上으로 緣邊部에 立地한다. 約21,000-22,000年前에 降下한 것으로 判斷된 AT(始良-丹澤) 火山灰의直上에서, knife形石器 (backed-blades)와 臺形石器 (flake-trapeze-shaped tools)을 包含하지 않고, 尖頭器(point), 敲石(hammer-stone), 削器 (scraper), 불탄 礫群와 함께 面的으로 確認되었다. 또 지금까지 이유적 周邊으로 採集된 석기는 모두 尖頭器 (point)이었다.

이 調査의 意義는 主로 以下の 2点이다.

- 1) 尖頭器(point)만 出土하고 있는 곳으로, 이 遺跡에서는 尖頭器(point) 만 必要한 生活(例로 狩獵)이 實施되었다.
- 2) 尖頭器(point)의 種類는 多樣性으로 構成되었다. 이들은 年代差의 所産이며 同時期에 共存한 것으로 보인다.

이런 研究는 지금까지 盛行하지 않고, 앞으로 宗原遺跡의 成果가 後期舊石器時代研究에 對한 責務는 極히 크다.

図 版



1. 宗原遺跡全景（南から）



2. 宗原遺跡全景（北東から）



1. 宗原遺跡全景（南東から）



2. 土層断面②（南西から）



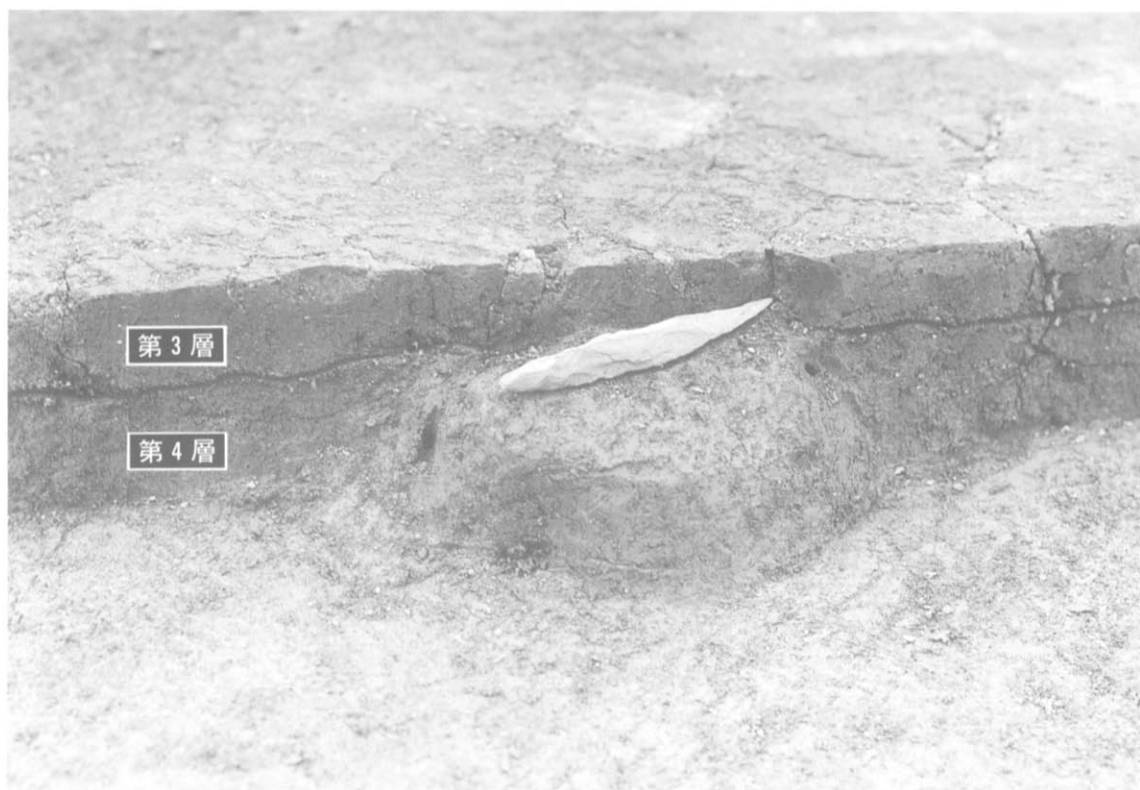
1. 土層断面①（南東から）



2. 土層断面③（南から）



1. 礫群出土状態（西から）



2. 石器（3）出土状態（南から）



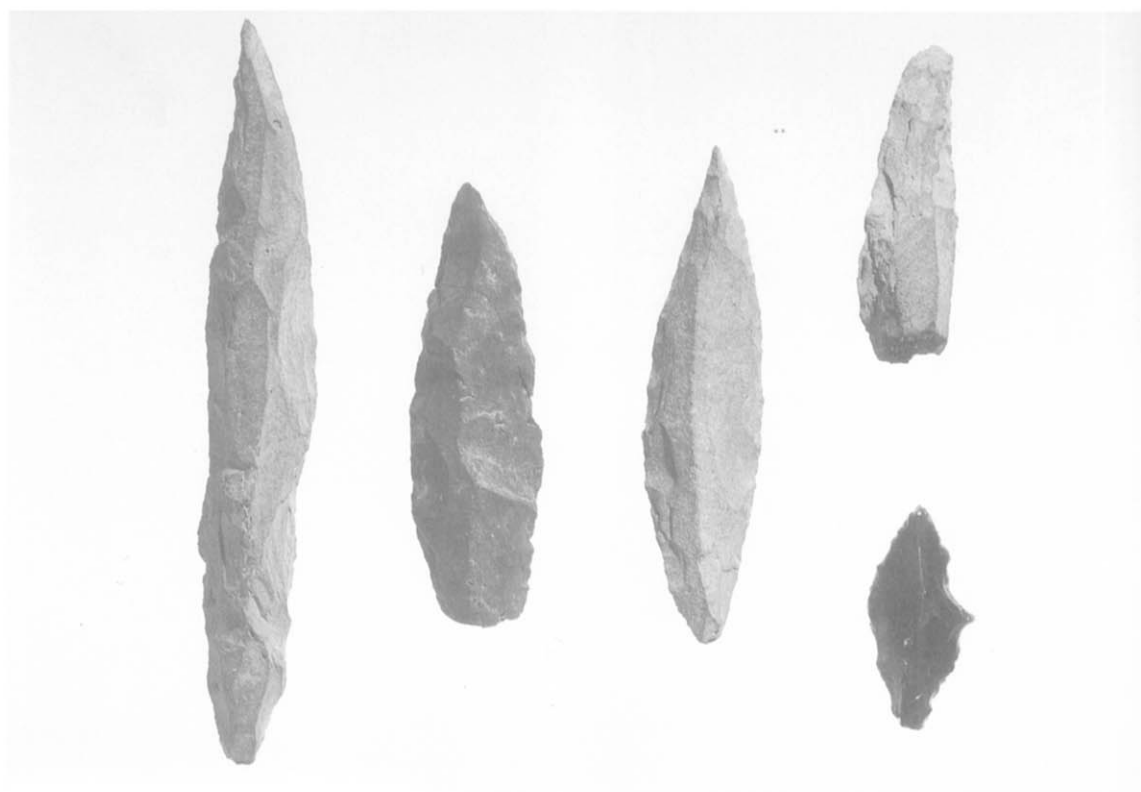
1. 石器 (25) 出土状态



2. 石器 (23) 出土状态



3. 石器 (20) 出土状态



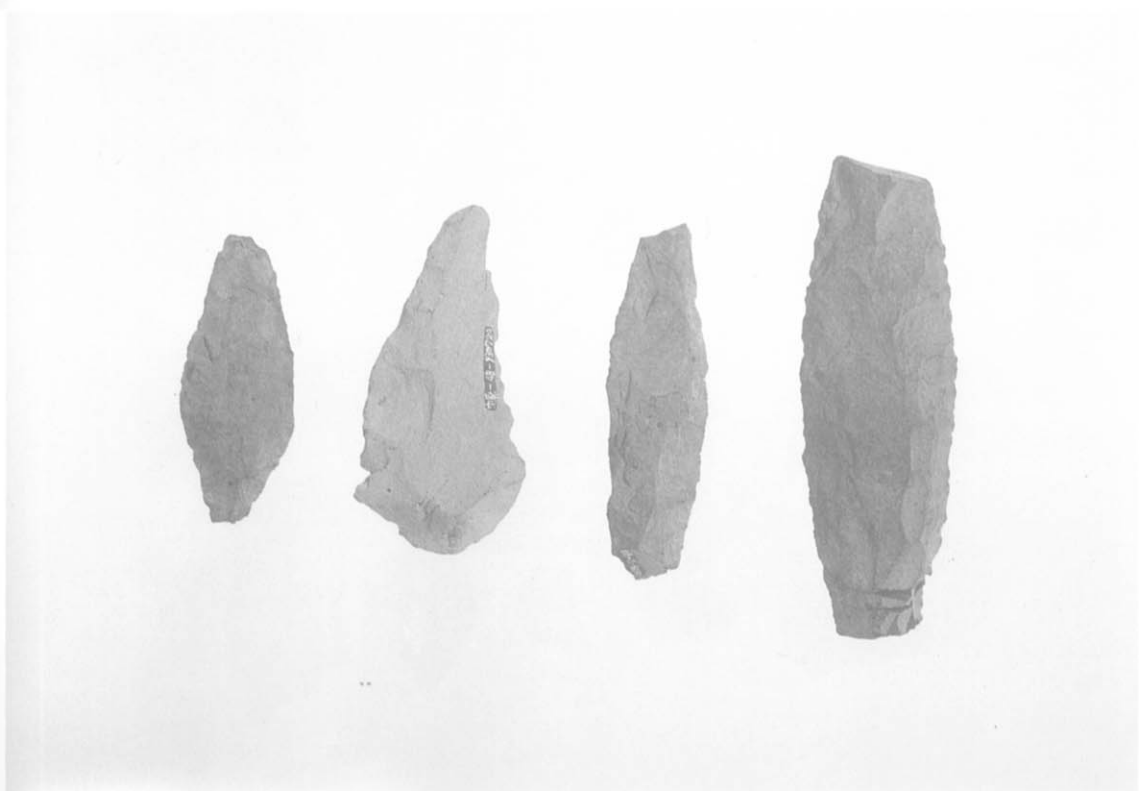
1. 宗原遺跡出土石器 1 (表)



2. 宗原遺跡出土石器 1 (裏)



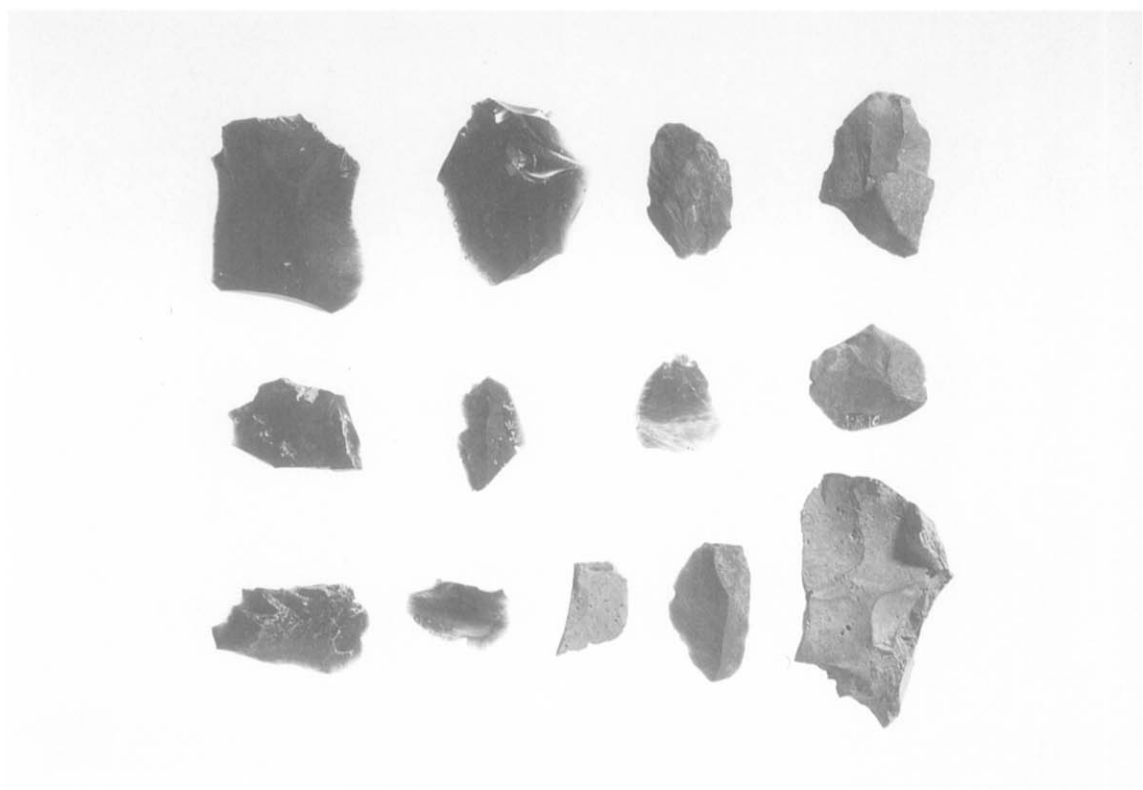
1. 宗原遺跡出土石器 2 (表)



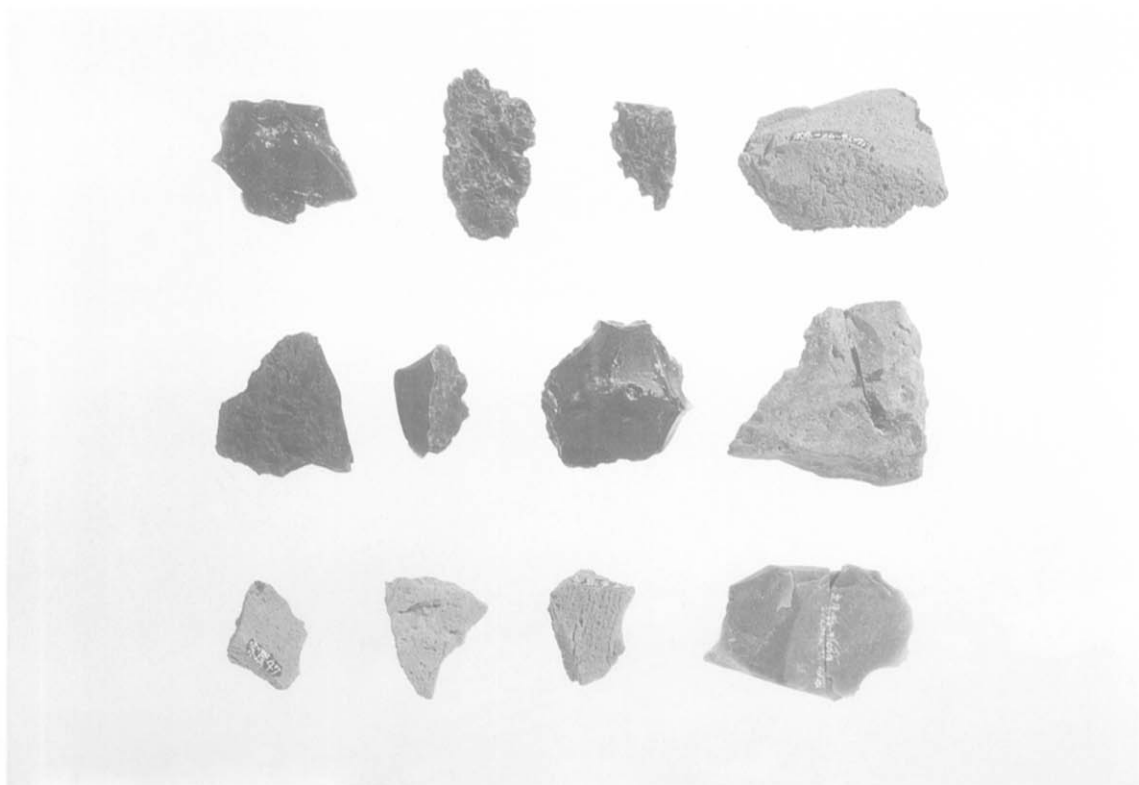
2. 宗原遺跡出土石器 2 (裏)



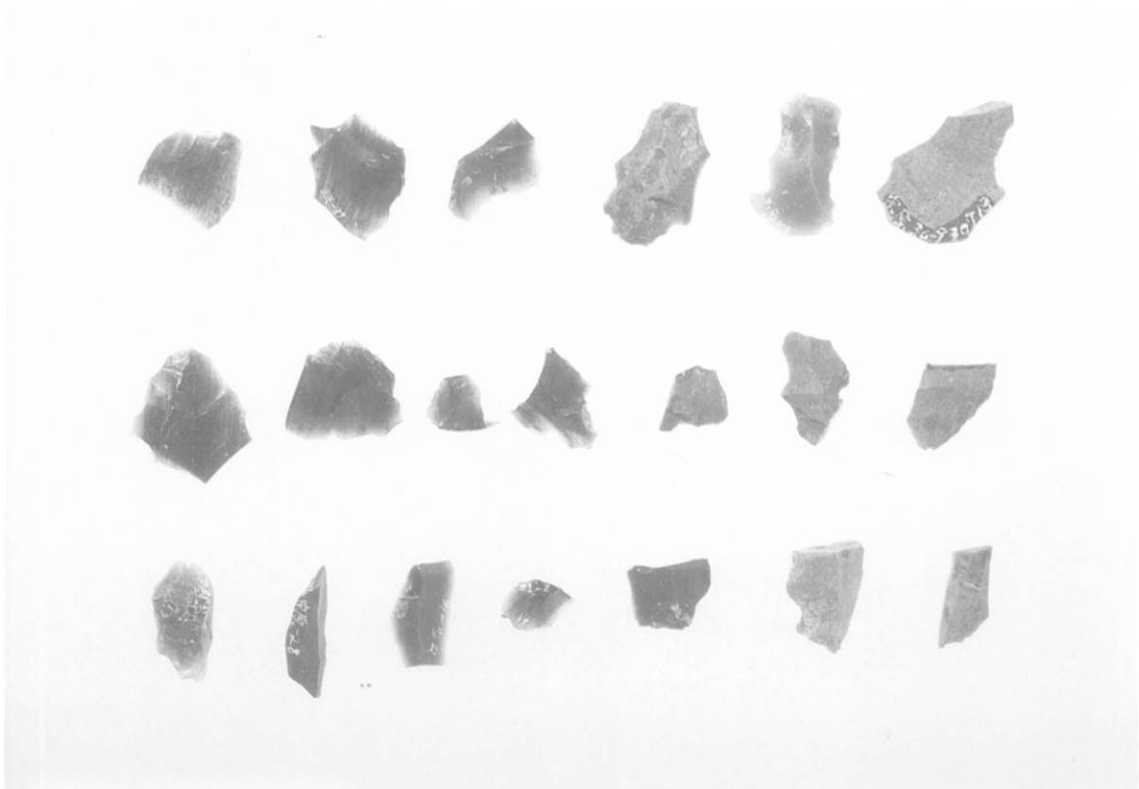
1. 宗原遺跡出土石器 3



2. 宗原遺跡出土石器 4



1. 宗原遺跡出土石器 5



2. 宗原遺跡出土石器 6



1. 土壙群全景（南から）



2. 土壙群全景（北から）



1. 1号土壇土層断面（北西から）



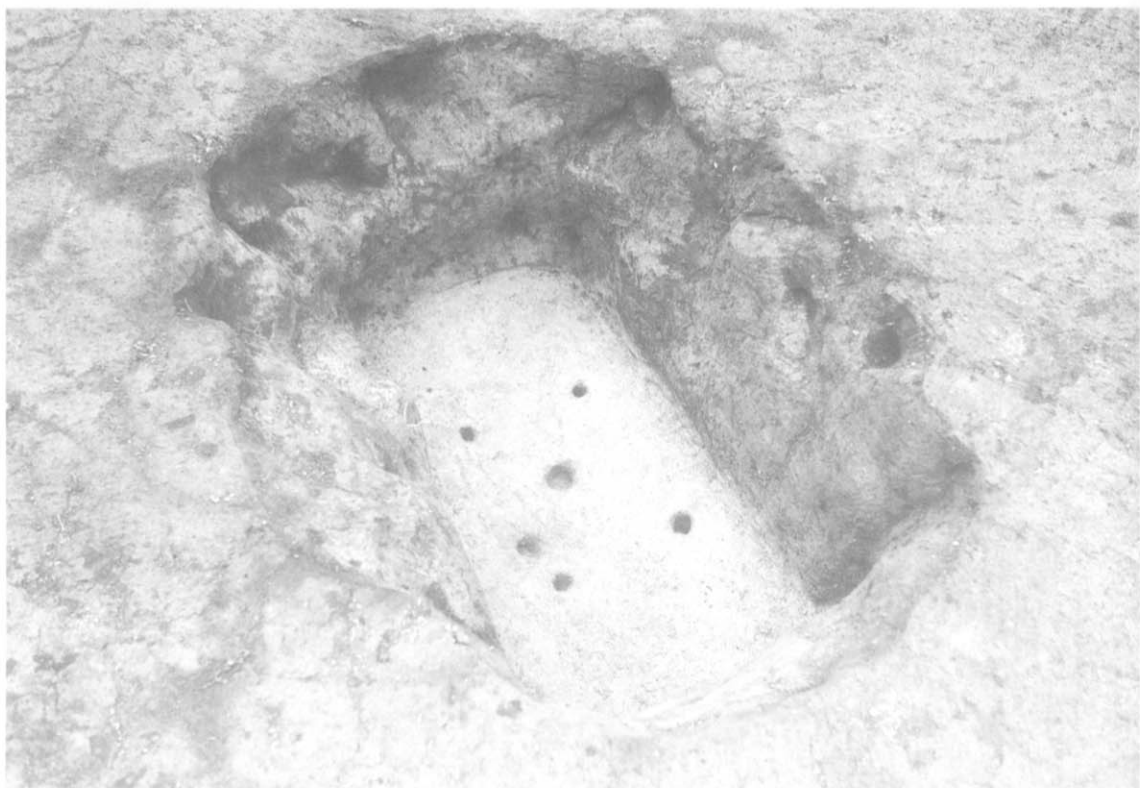
3. 1号土壇出土土器



2. 1号土壇（北から）



1. 2号土壙土層断面（北から）



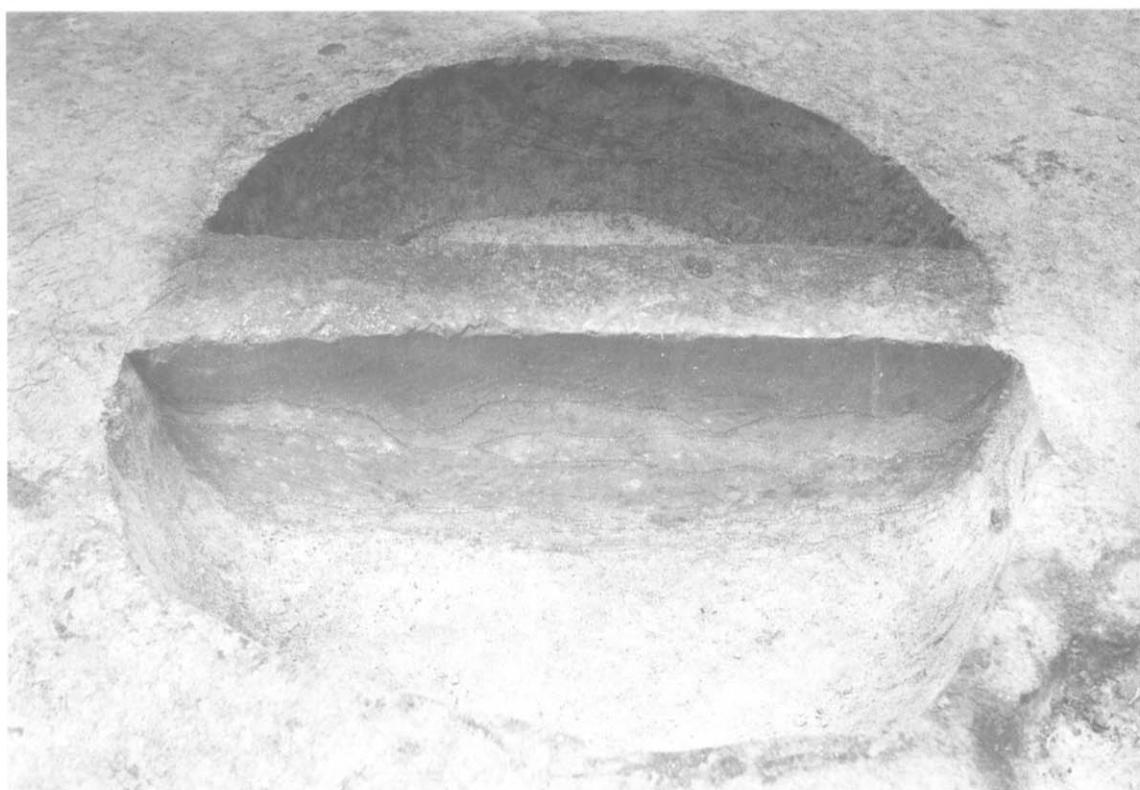
2. 2号土壙（南西から）



1. 3号土壌土層断面（西から）



2. 3号土壌（西から）



1. 4号土壙土層断面（北から）



2. 4号土壙（南から）



1. 5号土壙土層断面（西から）



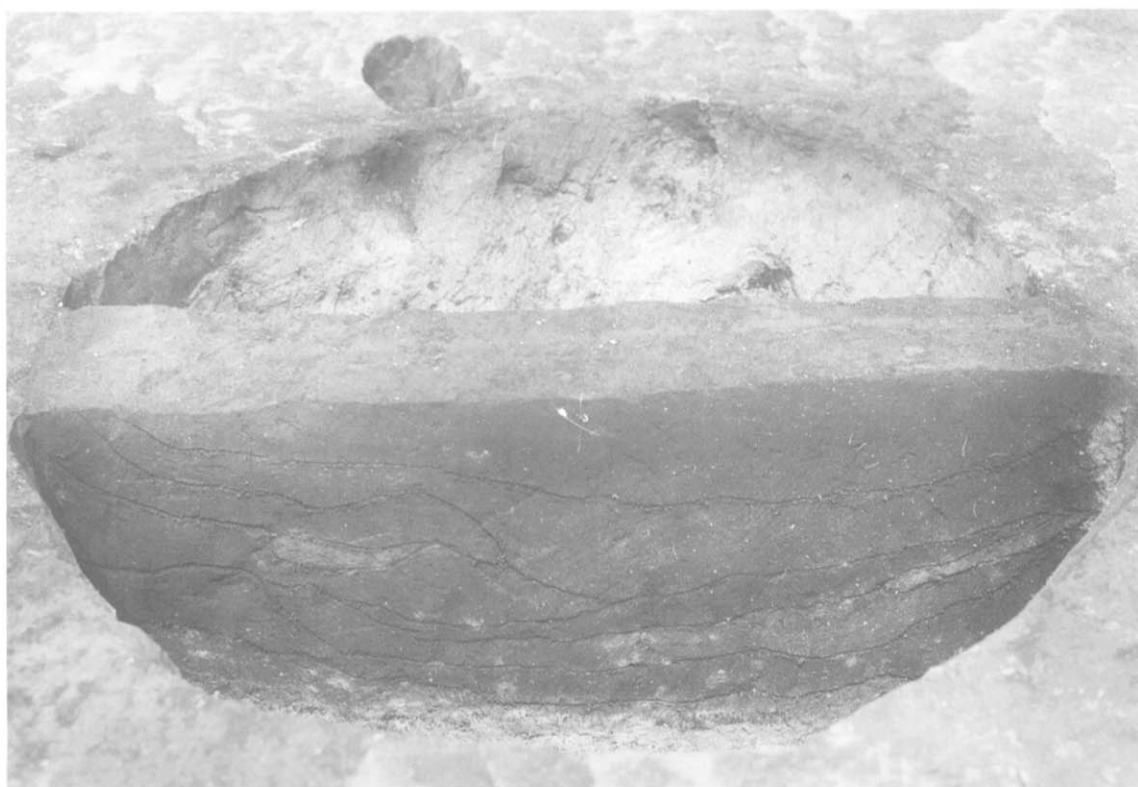
2. 5号土壙（南から）



1. 6号土壙土層断面と7号土壙（南東から）



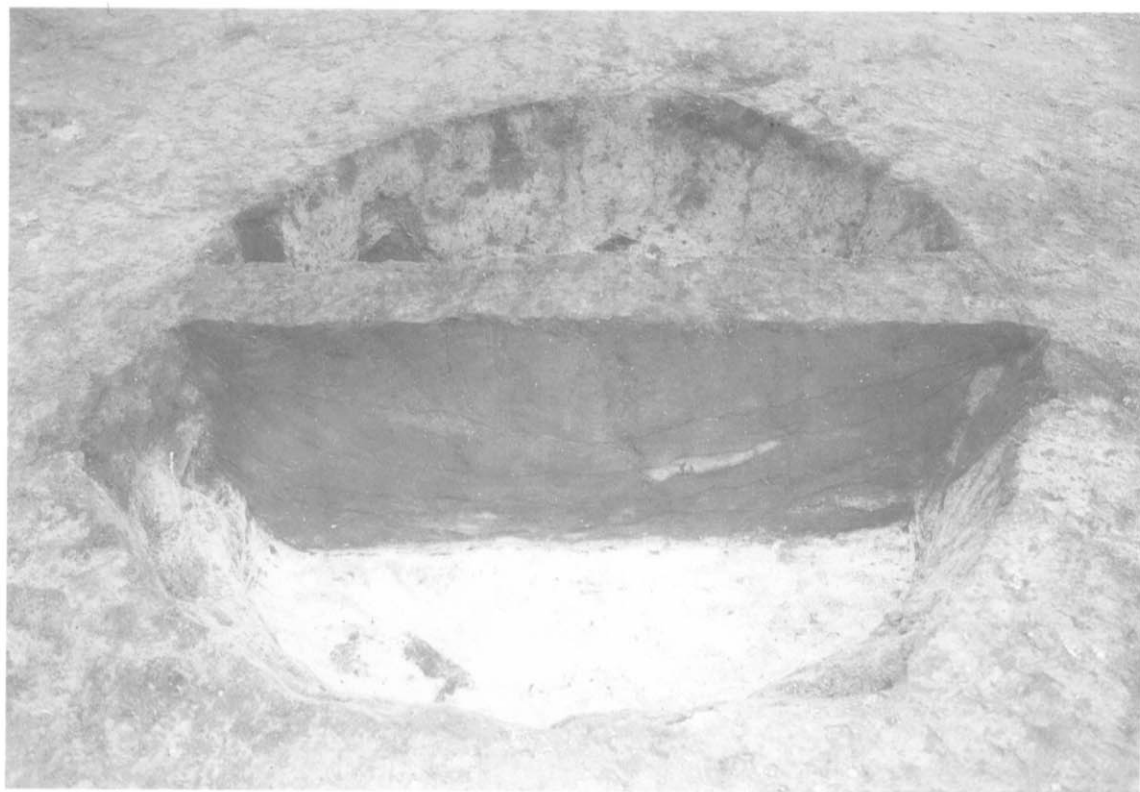
2. 7号土壙（北から）



1. 8号土壌土層断面（東から）



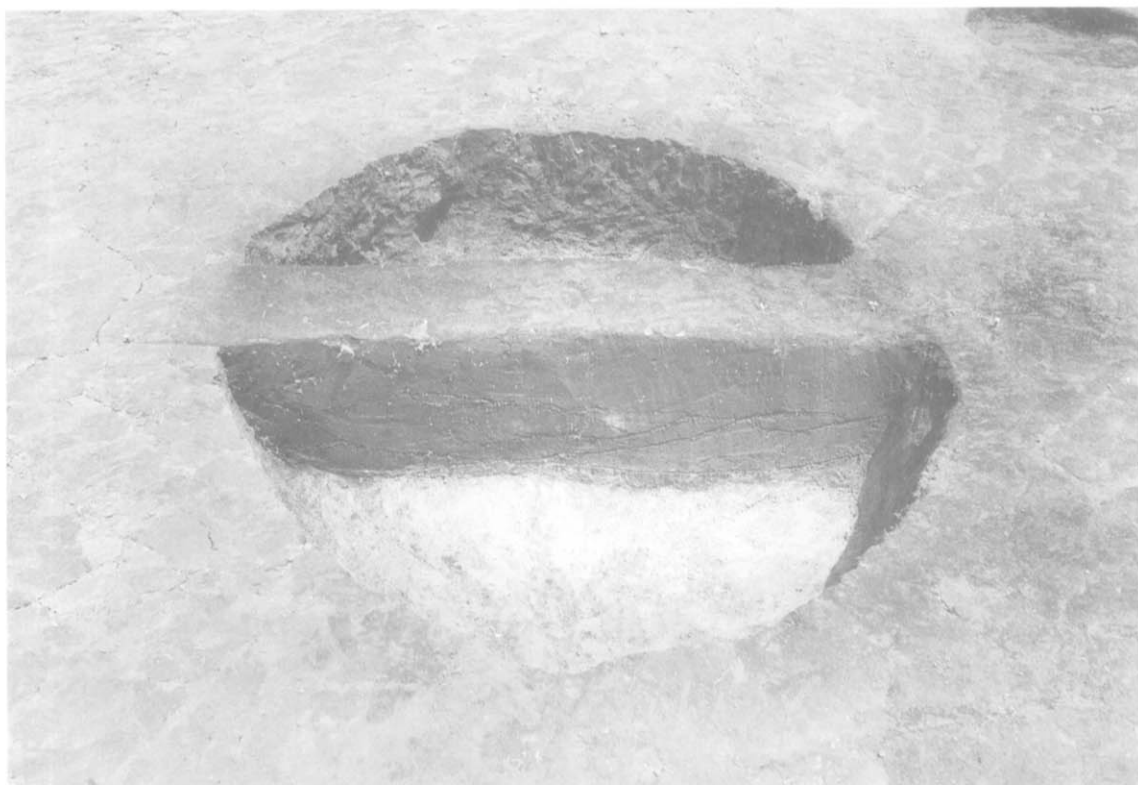
2. 8号土壌（東から）



1. 9号土壙土層断面（南から）



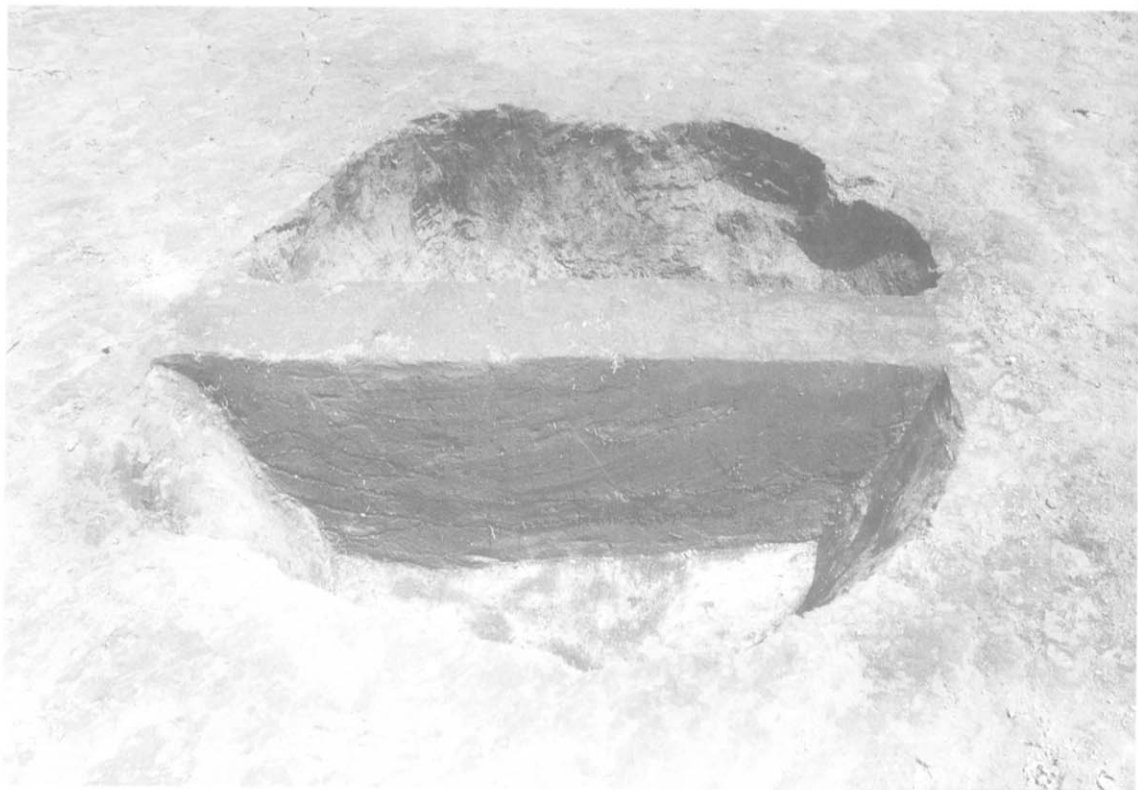
2. 9号土壙（東から）



1. 10号土塙土層断面（南から）



2. 10号土塙（南から）



1. 11号土塋土層断面（南から）



2. 11号土塋（南から）



1. 12号土壌土層断面（東から）



2. 12号土壌（東から）



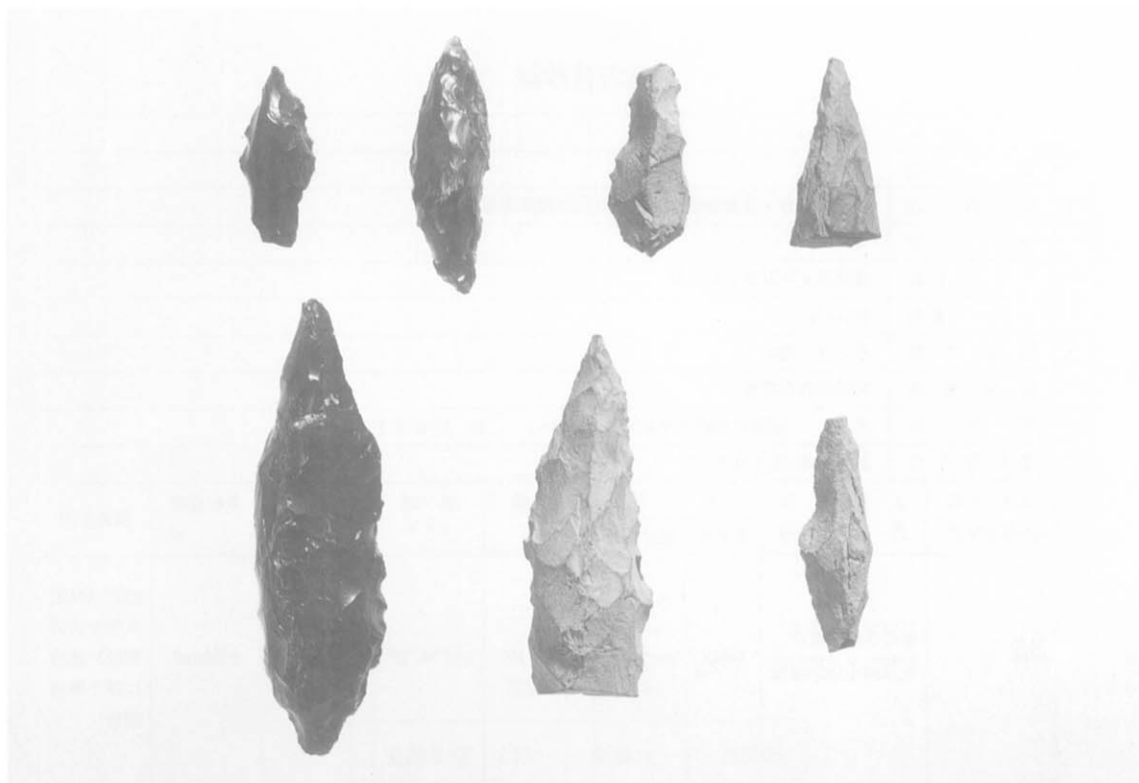
1. 北調査区全景（夜須町側・南から）



2. 1号溝礫出土状態（北から）



3. 1号溝出土葉英



1. 宗原・向福島遺跡採集石器（表）



2. 宗原・向福島遺跡採集石器（裏）

報告書抄録

ふりがな	そうばる い せき							
書名	宗原遺跡							
副書名	県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財関係調査報告							
巻次	5							
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第116集							
編著者名	水ノ江 和同							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812 福岡県福岡市博多区東公園 7-7 Ⅷ (092)651-1111							
発行年月日	西暦 1994 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
そうばる 宗原	ふくおかけんちくしのし 福岡県筑紫野市 おおあきにしおだあきそうばる 大字西小田字宗原	40217	—	33°26'10"	130°35'10"	1993.05.26 } 1993.07.31	2,000㎡	道路（県道久留米筑紫野線）建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物		特記事項	
宗原	集落	旧石器 縄文 弥生	礫群 1基 陥し穴 2基 土壌 10基		「尖頭器 9点 敲石 1点 スクレイパー 1点 弥生土器		尖頭器のみが、礫群とともに、包含層でなく面的に検出された。	

福岡県行政資料

分類番号 J H	所属コード 213305
登録年度 5	登録番号 14

県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告 5

そう ぼる
宗 原 遺 跡

福岡県文化財調査報告書 第116号

平成 6 年 3 月 31 日

発 行 福岡県教育委員会

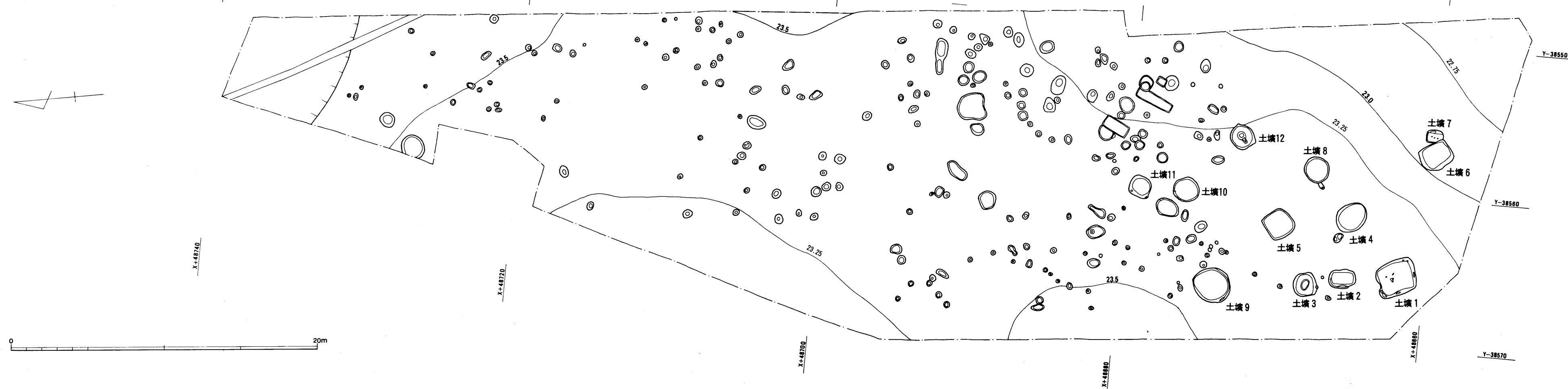
〒812 福岡市博多区東公園 7 番 7 号

電話 (092) 651-1111

印 刷 株式会社川島弘文社

福岡市東区箱崎ふ頭 6 丁目 6 番 41 号

電話 (092) 642-2665



付図 宗原遺跡遺構配置図 (1/200)